緋弾のアリア　―瑠璃神に愛されし武偵―　Re：Make

あこ姫

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

凶悪犯罪が多発する現代日本。

そんな凶悪犯罪に対抗すべく新設された資格が「武装探偵・通称武偵」。

その武偵を育成する高校、東京武偵高校。

そこに通う水無瀬凪優。

彼女にはフツーじゃない理由があった。

フツーじゃない彼女が仲間たちと織り成す物語。

お知らせ

この作品は中途までリメイク済みになっている『緋弾のアリア―瑠璃神に愛されし武偵―』の完全リメイク版となっております。

リメイク前を読んでいなくても楽しめますが、リメイク前を読んでくれると嬉しいかなって思います。

リメイク前》ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１４７１６５／

目次

弾籠め　人物紹介 ―― 1
再装填　人物紹介Ⅱ ―― 6
Ｉ　Ｌａ　ｂａｍｂｉｎａ　ｄａ　Ｉ，ＡＲＩＡ…
第００１弾　装填 ―― 10
第００２弾　空から降ってきた少女と瑠璃姫 ―― 14
第００３弾　遠山侍と瑠璃姫と…… ―― 19
第００４弾　その後の新学期の朝 ―― 26
第００５弾　凪優とキンジとアリア ―― 33
第００６弾　凪優とキンジとアリア@Ｎｉｇｈｔ ―― 43
第００７弾　平穏なき夜　Ｓｉｄｅ_Ｎａｙｕ ―― 48
第００８弾　平穏なき夜　Ｓｉｄｅ_Ａｒｉａ&Ｋｉｎｊｉ…&Ａｆｔｅｒ ―― 57
第００９弾　朝が来ようが変わらぬものもある ―― 66
第０１０弾　ウラ取りと条件 ―― 72
第０１１弾　転校生と本気の戦い ―― 85
第０１２弾　事件解決の最短最速は真似すんな。 ―― 96

弾籠め　人物紹介

主人公
名前：水無瀬（みなせ）　凪優（なゆ）
年齢：１７
誕生日：４月２日
身長：１６８ｃｍ
体重：５２ｋｇ
所属：東京武偵高校２年Ａ組（物語開始時）
所属学科：強襲科（メイン、ＲａｎｋＡ）
　　情報科（掛け持ち　ＲａｎｋＡ）
　　衛生科・狙撃科（自由履修）
携行武器：ＭＡＴＥＢＡ（マテバ）　Ｍｏｄｅｌｌｏ（モデロ）　６（セイウ）　Ｕｎｉｃａ（ニカ）
　　トーラス　ジャッジ　Ｍ５１３　ジャッジマグナム
　　ウルティマラティオ（ＰＧＭ）ヘカート Ⅱ
　　フォールディングナイフ×２
　　小太刀×２
　　長太刀×２
　　色金定女（イロカネサダメ）（日本刀／長太刀）
　　ダガーナイフ（投擲用・複数所持）
　　ワイヤー
愛車　　：トヨタＦＴ８６
　　カワサキＺＺＲ１４００（２００８年仕様）

イメージＣＶ：寿美菜子さん

説明：銀髪セミロングで紅色の瞳が特徴。
　スタイルは標準より少し良い（本人談）
　人付き合いもそんなに悪いほどではない。ぶっちゃけいえば「特筆することないフツー」。

戦闘時は状況判断次第で臨機応変に対応できるオールラウンダーで大体が平凡。
そんな彼女だが、記憶力がずば抜けて良く、対象を一度（それも一瞬）見ただけで、完璧に再現可能。
技のクオリティも本家と差異は全くない。
情報戦でもその記憶力・完全再生能力を遺憾なく発揮する。
その為、武偵高校入学前は各地を転々と回って技を習得していた。
無論、両親の方針である。
修行地のひとつに「間宮家」もあった為、間宮あかり・ののか姉妹とも仲が良い。
それもあってか、イ・ウーにスカウトされ、所属する事となる。
イ・ウー活動時の序列はＮｏ．３。（知らぬ間にＮｏ．２に昇格）
イ・ウー活動時の二つ名は「魔術師」，「氷天（ひてん）の魔女」。
そして、研鑽派（ダイオ）の党首も周囲からの強い要望と満場一致で務めることになる。
武偵としての二つ名は「凍て付く一刀（アイスエイジ）」
瑠璃色金の適応者で「心結び」をしているが、色金に取り込まれていない唯一の成功例。
（瑠璃神曰く、「よく解らないけれど凄く安心するから。取り込むなんて真似は絶対嫌。」）
瑠璃神の能力を借りることで身体能力等を向上させることができる。
第１段階
髪の色が瑠璃色に変化する。
能力の出力は３０％～５０％
能力を使うスタミナ・能力の威力・身体機能増強。
傷を負った際の自己治癒可能（他者への使用不可）
第２段階

髪が瑠璃色に変化し、唐棣色(はねずいろ)の瞳に変化する。
ついでに髪の長さもロングになる。
出力は５５％～７０％程
第１段階に比べ能力を使うスタミナ・能力の威力・身体機能増強率増加
治癒力を他者へ使用可能。
回復量は自身に使うよりも劣る。

第３段階
第２段階の容姿で髪型が一部三つ編みになっている。
出力は７５％～８０％くらい。
第２段階に比べ能力を使うスタミナ・能力の威力・身体機能増強率増加。
治癒力を自身に使う場合、瀕死でもなんとかなる。
他者への使用の場合は重傷者の回復がギリギリ。
この段階から髪を能力で変化させる広範囲系武装「七叉槍」が使用可能になる。
油断さえしなければ使用後の入院は回避できる。

第４段階
第３段階の容姿で髪が鬣っぽくなっている。
出力は１００％～Ｉｎｆｉｎｉｔｙ
通称『瑠璃神モード』
瑠璃神の能力を全開放させた形態。
主人格は凪優。
神の能力を開放しているので凡ゆる点に於いて第３段階と比べ物にならない。
治癒力は自分に使う場合と他者に使う場合の差は無い。
その反面、強大すぎる能力故に身体の負担が大きい。
入院は非回避・・・・通り越して最早確定。

第５段階
第４段階の上位に位置する形態。
出力は計測不能。
最早瑠璃神そのもの。
威力等全てにおいて人外レベル。
死者蘇生も出来るとか出来ないとか。
主人格は瑠璃神。
身体の負担は凄まじく、長期入院確定で済めば良い方。
運が悪ければ肉体が能力に蝕まれ死亡する。

術式兵装・〝氷の女王〟（プロ・アルマティオーネ・クリュスタリネー・パシレイア）
自身の持つ能力（氷を操る＝ジャンヌと同系統）の最終形態。
広域殲滅魔法である「千年氷華（アントス・パゲトゥ・キリオン・エトーン）」を発動遅延術式（解放・固定）を組み合わせて発動させた後、自身の体内で技の威力を巡らせるようにさせる（掌握する）事によって完成する形態。
発動時に周囲数キロに自らの氷圏を展開させ、支配圏に置く事ができる。
その範囲内であれば、上級レベル以下の氷属性の技を無詠唱かつ、無制限で発動させることができる。
瑠璃の能力は治癒力と体内での技の維持に使う程度なので、第２・５段階に比べ、燃費はいい。
大体は「魔法先生ネギま」に登場するエヴァジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルと同様。
形態の出力は８５％～９５％位で第３段階と第４段階の間くらいの強さ

瑠璃神　／　三嶋花梨（みしまかりん）
身長：１６４ｃｍ（人間時）
体重：４７ｋｇ（人間時）
３Ｓｉｚｅ：８４―８５―８４（人間中）
所属学科：強襲科・ＣＶＲ（ＲａｎｋＳ）

携行武器：コルト　ダブルイーグル
　　ＤＷ　ダン・ウェッソンリボルバーＭ１５―２
　　日本刀×３
イメージＣＶ：水樹奈々さん

緋色金・瑠瑠色金・璃璃色金に続く瑠璃色金に宿る意志。
緋緋神・瑠瑠神・璃璃神に続く４人目の色金姉妹。続柄的には璃璃神の妹。
普段は瑠璃色金の欠片が埋め込まれたネックレスに宿る。
スタンス的には緋緋神よりだが、平和主義。
性格は超のつくほど人見知り。（緋緋神曰く、「人嫌いじゃないのが可笑しい」）
心を開いた人間にはすごく甘える甘えん坊。
時より台詞の中に顔文字を入れることもある。
そんな彼女だが、戦闘中に感情が昂ぶると緋緋神っぽくなることもある。

普段は人間『三嶋花梨（みしまかりん）』として東京武偵高校に通う。
テニス部に所属しており、後輩からの信頼も厚い。
バレンタインデーでもかなりチョコを貰うほどである。
しかし、元来の人見知りもあり、人と接するのが苦手。
テンパる事も多々有るが、人見知り克服目指し頑張っている。

器となる人間との適応条件は「瑠璃神自身が心を開ける人間である事」のただ一つ。
しかし、前述の性格から主人公以外での適応者は誰一人いない。
瑠璃神の適応者候補はこれまでに主人公以外にもいたが、全員が「条件不一致」であった。
その結果、その候補者全員は精神崩壊を起こし直ぐに死亡した。
故に「瑠璃巫女」が存在せず、主人公が史上初の「瑠璃巫女」となった。

再装填　人物紹介Ⅱ

ＮＡＭＥ　姫神（ひめがみ）　結衣（ゆい）
ＡＧＥ　１６（初登場時）
身長　１６４ｃｍ
体重　４７ｋｇ
３Ｓｉｚｅ　７３―５６―７９
所属：東京武偵高校２年Ａ組（初登場時）
所属学科：強襲科（ＲａｎｋＡ）
携行武器：Ｓ＆Ｗ　ＰＣ　Ｍ６８６　Ｐｌｕｓ
日本刀（長刀×２，小太刀×４）
金属矢（投擲用）
愛車：ヤマハ・ＦＪＲ１３００ＡＳ（２００８年仕様）

容姿　茶髪（ロング・アホ毛装備）で碧眼。
貧乳。（発言したら、逆鱗に触れる）
イメージＣＶ：井口裕香さん

説明：初登場第０１０弾「転入生と本気の戦い」
性格は天真爛漫そのもの。少し……かなりの天然入り故にチームメイトから「バカ」認定を受けている。
だけど、戦闘になればそれが嘘のように無くなる。（作戦は猪突猛進の脳筋系が多いけど）
イ・ウー所属（現役）の炎を操る超偵。
イ・ウーでの二つ名は「紅蓮の魔女」。本人はノリノリで名乗っていた。
武偵としての二つ名は「焔の旋刃（イクスプロージョン）」
あと、イ・ウー内で「魔女連合」なるものを結成した張本人である。

イ・ウー時代のエピソード
①　情報を持っている人物に情報を吐かせるために尋問したとこ

ろ、何故かお相手はトラウマ付きの精神崩壊起こしてた。
（その後、全員総出で相手のトラウマを治した）
②　ちょっとしたいざこざで喧嘩になったところ、そのフィールドがほぼ焼け野原に。
多額の賠償請求が来たため、会計監査担当・桐ケ谷瑞穂に凪優が怒られた。

翡翠　／　椎名翠（しいなみどり）
身長：１６１ｃｍ（人間時）
体重：４５ｋｇ（人間時）
３Ｓｉｚｅ：８３―５６―８５（人間時）
容姿：翡翠色のロングヘアー（サイドテール）、紅い瞳
イメージＣＶ：戸松遥さん
所属学科：強襲科・狙撃科（ＲａｎｋＡ）
携行武器：スタームルガースーパーブラックホーク
ＣＩＳ　ウルティマックス１００
トンファー
鎖付き短剣
初登場は「第０１０弾　転校生と本気の戦い」
後に結衣と共にまえがき担当になる。（主に出番そこだけ）
色金に宿る神の眷属の１人。
自身の御神体は日本・新潟県糸魚川の姫川流域にあると言われている。
瑠璃神の直属の眷属で瑠璃を「瑠璃姉様」と呼び、慕う。
故に瑠璃神に仇を成す者には容赦なし。
相棒である結衣の天真爛漫さに手を焼いている時もあり、基本的に抑制役である。
しかし、「結衣以外の相棒はそうそう簡単に居ない」という程信頼している。
翡翠の能力を使う者は容姿が翡翠と同じく、翡翠色の髪に紅い瞳に変化する。

基本は相棒である結衣が身に付けている翡翠のチョーカーに宿っている。
普段は実体化して椎名翠として東京武偵高に通っている。
実体化して戦闘することが可能でその際は風属性の能力を駆使しつつ、接近戦多様のインファイター。
（だが、誰も遠距離攻撃に弱いとは言っていない）
但し、実体化して戦闘する際に能力を多く消費するため、長時間の先頭には不向き。
（出来ない事はないが、能力の強さは普段と比べ劣化する）

霧島　葵（きりしま　あおい）
身長：１５７ｃｍ
体重　３６ｋｇ

東京武偵高　２年Ａ組所属
所属学科：情報科・強襲科・救護科（Ｒａｎｋ　Ａ）
携行武器：トーラス・レイジングブルＭｏｄｅｌ　４４４（Ｕｌｔｒａｌｉｔｅ）
日本刀（長×２・小×４）
超能力：有り（水系能力）
愛車：ホンダ　ＣＢＲ１１００ＸＸ　スーパーブラックバード
容姿：緑でぼさぼさの髪に銀色でぱっちり目
イメージＣＶ：日笠陽子さん
初登場は「第０２０弾　もうひとつのはじまりは戦姉妹試験勝負」のあとがき。
本編初登場は「第０２３弾　自分の実力を知るには先ずは自分の身体から」。
性格は「優しい」。
ツンデレ娘の扱いも何のその。
偶に「オカン」とか言われることも。
その際は「誰がオカンだって……？」とツッこむ。

弄りすぎると逆鱗に触れ、水没させられるので要注意。
腰のあたりを触られるのが物凄く弱い。
少し触られただけで一気に崩れるほど。
故に理子あたりはかなりの頻度で制裁されている。
主人公（凪優）とはイ・ウー時代からの顔見知り。
カツェの一番弟子（自称）で「魔女連隊」でもカツェの秘書的存在。
イヴィリタさんからも「カツェの世話ヨロシク！」と言われている。

Ｉ Ｌａ ｂａｍｂｉｎａ ｄａ Ｉ，ＡＲＩＡ…

第００１弾　装填

―空から女の子が降ってくるって思う？

昨日放送していた映画ではそういうシーンがあった。

まぁ同居人は見ていたみたいだけど、私は別に興味ある内容ではなかったから見てないけど。

それはさておき、映画とか漫画とかでよくある導入シーンではあるよね。

そういうのって、不思議で、特別な事が起きるプロローグ。

そのストーリーでは主人公は正義の味方とかになって大冒険……というのがお約束みたいな？

「『ああ、だから先ずは空から女の子が降ってきてほしい！』……なんていうのは浅はかってモンだ。だってそんな子は普通の子な訳がない」

「普通じゃない世界に連れ込まれ、正義の味方仕立てられる。……そんなことは現実において危険で、面倒なことに決まってるんだ」

これが私の同居人、遠山キンジ（性別・男）の論で実にＴＨＥ・平凡人生を望む彼らしい論である。

まぁ、私・水無瀬凪優（性別・女）はそうは考えないが。

「なったら、なった。ケースバイケースで乗り切る」

これだ。楽天的と思うかもだが、実はすごく難しい。

……そんなことはさておいて。

あぁ、今日も朝に飲むコーヒーは美味しい……。

この朝のコーヒータイムは（男子）寮の自室での至福の時……。

ここで、疑問に思った方もいるであろう。

「なぜに女子である貴女が男子寮に住んでいるのか」

……と。

答えは武偵高校らしい答え？　だった。

酔った勢いで喧嘩した教師（誰とは言わない）が投げた手榴弾が被爆して大破。
↓修理に莫大な金がかかるので安価な取り壊しで済まよう。
↓入寮者の方が溢れた（↑Ｎｏｗ）

……身も蓋もない。
「あ、おはよー。キンジ」
「ああ、おはよう。凪優」
前述の同居人こと、遠山キンジはトランクス一丁の格好であった。
寝起きだし、当然の格好である。
ここで、一々叫ばない私はこの光景になんというか慣れた。
それも女性としてどうかと思うが。
「もうそろそろ来る頃だし、着替えてきたら？」
「もうそんな時間なのか。わかった」
私の助言に従い自室へ着替えに戻るキンジ。
私は飲み終わったコーヒーカップを洗う。
洗い終わったと同時だった。
……ピン、ポーン……
慎ましいチャイムが鳴った。
ほら、やっぱり。
私は玄関の方へ行き、扉を開けると玄関の扉の前に立っていたのは、純白のブラウスに臙脂色の襟とスカート……東京武偵高校の女子制服（冬服）に身を包んだ、黒髪の絵に描いた大和撫子だった。
彼女の名は星伽白雪。実家は由緒ある星伽神社。
つまり、彼女は巫女さんである。
キンジとは幼馴染で白雪はキンジの事を「キンちゃん」と呼んでいる。
「あっ、キ……凪優ちゃんおはよう……」
「あっ……ごめんね？　ご期待に添えなくて。キンジはさっき起きたばっかりで今着替えているから……」
「え、あ、ううん。気にしないで、凪優ちゃん」

「えっと、今日はどうしたの……って、成程ね……」
「うん。ほら、私、昨日まで伊勢神宮に合宿に行ってて、キンちゃんのお世話何もできなかったし、それに凪優ちゃんばっかりに迷惑かけるわけにもいかないから」
「もう、そんなに気にしなくてもいいのに……。せっかくだし、リビングで待ってたら？　キンジももうすぐ来るはずだし」
「え、いいの？」
「私だって決定権の半分はあるから……ね？」
「お……おじゃましますっ」
　白雪は角度で言ったら９０。位の深いお辞儀をしてから玄関に上がった。靴は言わずもがなきちんと揃えてある。
　白雪を迎え入れて私は学校に行く為、準備を整える。
「凪優ちゃん、もう行くの？　今日は早いね」
「まぁ……ね。ちょいと野暮用もあるから。じゃ、あとよろしく」
「うん。いってらっしゃい。また後でね」
「うん。また後で」
　白雪に後を任せて、私は寮を後にして、情報科の分室に向かう。
「さて……と。遂に動いたか。武偵殺し。しかし、標的小さいなコレ」
　私のスマホに表示された武偵殺しの情報。
「確かに規模がどんどん大きくなってたのに、確かに変かも。何か目的でもあるのかな？」
「目的？」
　私のスマホに書かれていたことを後ろから覗き込んでいたのは『瑠璃神』こと、三嶋花梨（みしまかりん）。
「うん。ほら、今回の電波傍受なんだけど、かなり単純だったよね？」
「確かに……。情報科所属でなくとも良いくらいに単純なパターンだった……」
　花梨の指摘に勘付く私。
「て、事は武偵殺しが狙ってるのって……」
「……成程。しかし、まんまとやられたな。でも……」
「『でも』……？」

ニヒルに笑う私を不思議そうに覗き込む花梨。
「まんまと乗ってあげようじゃないの。そんでもって、この私を敵に回した事を後悔させてやんよ！」
「そうだけど、１つ追加しておいてよね！」
私の言葉に追加条件を出す花梨。
「何を追加するのよ、花梨」
「『私達を』だよっ！　凪優」
「はいはい。わかってるって。急いでキンジと合流するよ。花梨」
「（。Д。）ゞ　リョーカイ!!　じゃあ私は精神体に戻ってサポートするね！」
フツーの女子高校武偵の水無瀬凪優。
人に好意を示すも適合者が存在しない色金に宿る神の中で一度機嫌を損なえば死さえ有り得る気難しい色金の神等と数多の謂れを持つ瑠璃色金に宿りし意志・【瑠璃神・瑠璃】。
混じりそうに無く通常であれば、相反する２つの存在。
これは、その２つの存在が適合している物語。
続くんだよ

第００２弾　空から降ってきた少女と瑠璃姫

「〈凪優、該当の自転車は予想通り第二グラウンドに向かってる。〉」
「まぁ、人気の無い所つったら、そこしかないからね……」
　瑠璃からの情報に『想定内』だと返す私。
「〈で、どうするの……？　〉」
「被害者……キンジの救出と自転車破壊を同時に……かな」
「〈『同時』ってのは幾ら何でも凪優一人じゃ……〉」
「うん。キンジと並走してる厄介物もあるし、一人じゃ無理」
　私は態とらしく『お手上げ』の仕草を見せる。
「〈じゃあ、どうするの？　〉」
「協力者に頼むのよ。丁度いい人材が女子寮の屋上にいるみたいだし」
「〈屋上に……？　〉」
「そう。屋上に」
　そう言ってから、私は右耳に装着の通信機を今回の協力者に繋げる。
「アリア、もうそろそろそっちからも視認出来る範囲内に入るから準備お願い」
「わかったわ。手筈通りに行くから、そっちは頼んだわよ、凪優」
「わかってる。任せなさいな」

　通信を終了した私は準備に取り掛かるべく、背中に背負っていた狙撃銃（対物）を取り出した。
『ウルティマラティオ（ＰＧＭ）ヘカートⅡ』
　フランスのＰＧＭプレシジョン社が開発、製造しているウルティマラティオシリーズの中でも最大口径モデルの銃で対物ライフル。
　人物に向かって使う代物ではないが、今回は大丈夫だろう。
　狙いが人じゃないから９条には抵触しないだろーしさ。
　弾を装填し、スコープでキンジの自転車を追いつつ、その時を待つ。
　それと同時にアリアが女子寮の屋上から飛び降りてパラグライ

ダーで滑降。
そして、爆弾付きの自転車を必死に漕ぐキンジの方へ降下し、ブランコの様に体を揺らしＬ字型に方向転換。
同時に左右の太もものホルスターから銀と黒のコルトガバメントを抜く。
キンジが頭を下げるより早く、問答無用のセグウェイ破壊。
流石、アリア。ランクＳは伊達じゃない。
ホルスターに銃を戻したアリアは、スカートのオシリを振り子みたいにしてキンジの頭上へ。
キンジの真上に陣取ったアリアは踏んだ。キンジの脳天を思い切り。
気流を捉えたアリアは上昇して再びグラウンドの対角線上めがけ、急降下＆キンジの方にＵターン。
さっきまで手で引いていたブレークコードのハンドルに爪先を突っ込み逆さ吊りの姿勢になってそのままっすぐ飛ぶとなれば、キンジと対面状態。
つまりはキンジとアリアが抱き合う形となるわけで。
「そういえばキンジが昨夜見ていたアニメ映画にもこんなシーンあったなー。まぁ、男女の位置が今のシチュと逆ではあるけれどｗｗｗ」
そう思っていたら、キンジとアリアは上下互い違いのまま、空へ攫われていく。
キンジが自転車から離れ、自転車の爆弾が作動する刹那の瞬間を逃さず、私は引き金を引いた。
ヘカートの銃身から射出された１２．７ｘ９９ｍｍ　ＮＡＴＯ弾は自転車の爆弾めがけ飛んでいく。
ＮＡＴＯ弾が爆弾の壁に一瞬触れたその時、爆弾の圧力感知センサーが反応し、爆弾起動のカウントダウンが開始。
そのカウントダウンは通常であれば５～１０秒位あるだろうが、この爆弾は違った。
カウントダウン開始１秒で爆弾は起動し、閃光・轟音・爆風に包ま

れた自転車は木っ端微塵になった。
勿論、「木っ端微塵」なのだから修復は不可能に限りなく近い。
修復よりも新しく購入した方が確実に安価で済むだろう。
間一髪助かったキンジとそれを助けたアリアは体育倉庫の方に吹っ飛んでいった。
『さて、キンジ達と合流せねば』
そう思って、私はヘカートを仕舞うと同時に違和感を感じた。
「ぬったりしていってね!!」
振り向くと緊張感の欠片もないセリフと共に、現るＵＺＩ付きセグウェイ。
全部で６０台くらいか。
明らか多いでしょ……オーバーキルにも程がありすぎるわ。
あと、ここは新潟ではなく東京・お台場だ。
「〈突っ込みして現実逃避してる場合じゃないでしょ！　来てるよ!!〉」
瑠璃に注意され、現実に戻される私。
ここで無抵抗だったら即お陀仏確定だけど、そんなの真っ平御免だし切り抜けてやろうじゃないの。
「瑠璃、少し能力（チカラ）使わせて貰うよ。――来れ（アデラット）、力（Ｓｔｒｅｎｇｔｈ）」
私が力（Ｓｔｒｅｎｇｔｈ）のタロットカードをカードホルダーから取り出し、発動させる。
すると、私の銀色の髪に瑠璃色のメッシュが入る。
この状態で自身に宿る瑠璃神の能力が使える状態の第１段階状態になり、身体能力等が大幅に向上。
能力を使う際は主人格が瑠璃になるが、この段階では主人格は私のままである。
▪
「さて……と、銃弾は温存しておきたいから、今日はこっちで行くか。……少し痛いけど」
そう言って、私は小太刀を２本抜く。
此処で『色金定女（イロカネサダメ）』を使っても問題はないが、切り札は温存。これ

に限る。
「〈なるべく無傷で切り抜けてよね。治癒で能力(チカラ)使うと持続短くなるし。〉」
「さらっとハードル上げないでよ……。まぁ善処する」
そう言って、セグウェイに突貫する私。
セグウェイはそれを感知し、装備されているＵＺＩを発砲・一斉射。
銃弾の雨が私に向かって降り注ぐが、被弾はしなかった。
てか、被弾なんざさせねぇよ？
治癒で能力(チカラ)なんて使いたくないし。
私は手に持っている小太刀で全部弾く。若しくは斬る。
キンジの呼び方だと「弾丸逸(スラッシュ)らし」「弾丸断(チョップ)ち」と言ったところだ。
銃弾の雨の半分を切り抜けた今のところ、全く被弾せずに無傷で済んでいる。
こんなの、無傷でいなすのは、通常状態では無理だ。すくなくとも。
この状態だからこそ、無傷でいられるのだ。
最も、相棒(瑠璃)の鍛錬が無ければ今の私は無傷では居ないだろう。
しかし、このままいつまでも防御だけでは埒があかないので、弾いている弾丸を攻撃利用する。
その方法は単純に
『弾丸の弾く方向を変える』
ただこれだけだ。
その狙いはセグウェイに後付けで装備された制御チップ。
そこを破壊すれば、セグウェイ・ＵＺＩを破壊せずに鎮圧できるが、制御チップのサイズが大きい……訳なくかなり小さい。
通常ならば、狙いを定めるだけでも一苦労だろう。
そう、通常ならば。
先程も言ったとおり、私の身体能力は瑠璃の能力によって大幅に向上されている。
それは動体視力だって例外じゃない。どんなに私を追尾してセグウェイがちょこまか移動しようが、関係ない。
今の私は明確に制御チップに狙いを定めることができる。

そして一度、制御チップの破壊に成功すれば、私の完全記憶再生能力で寸分の狂いもなく残り５９台全ての制御チップを破壊出来るのだ。

さぁ、セグウェイ無効化劇場の開幕だ。

「（ ´ー、）フゥー… ようやく終わったぁ……」

６０台全ての後付け制御チップを全て破壊し、セグウェイは機能停止した。

さてと、装備科（アムド）にこいつらの引取りを頼むか……文ちゃんあたりが大喜びで引き取ってくれるだろう。

「〈お疲れ様、凪優。今回は無傷で切り抜けれ無かったけれど、微細な傷程度の軽傷で済んだし、まぁ及第点ってところかな……。〉」

「……手厳しいな瑠璃は」

「〈甘やかすよりはマシでしょ？ 〉」

「確かにね……。さて、キンジ達と合流しましょ」

「〈そうだね。〉」

瑠璃との会話後、凪優は先程のセグウェイを一台パクって（※許可済）、キンジ達のいる体育倉庫へ向かった。

続くんだよ

第００３弾　遠山侍と瑠璃姫と……

さて、確かあの体育倉庫に突っ込んだはずのお二人さんは音からして跳び箱の中だと思うんだけどな……。

そう思った私は体育倉庫に赴き、キンジとアリアの無事を確認しに行く。

「アリア、キンジ、だいじょb……お邪魔しましたっ！　おふたりはごゆっくりなさってくださいっ！」

二人の様子を見た瞬間、私は急速に顔を真っ赤に染め即座に扉を閉めた。

イマワタシハナニモミテナイデスヨ？

「〈明らかに動揺してるやん。何を見たのさ？　一体。〉」

「瑠璃には刺激強いと思うよ……。うん」

「〈その答えに納得する訳無いじゃん。私のほうが歳上なのに〉」

「それでもなのっ！」

「〈動揺しすぎ……凪優〉」

瑠璃の指摘に反論しようとするけれど内心は保ってられなかった私が取る行動は唯一つ。

『ここは立ち去るが勝ち』

そう思って戻ろ……「「ちょっと、待て（ちなさい）!!」」

……なにか異論でも？

「「異論しかないわっ!!」」

ナニコレこのハモリよう。息ピッタシだな。あなた達。

「〈もうパートナー組んじゃえばいいんじゃね？　こいつら〉」

偶然だな、瑠璃。私もそう思う。

「……大体、跳び箱の中で馬乗りになっているあなた達を見て私は空気を読んだのだけど？」

「だから、その前提から間違ってるんだよ！　（のよっ！）」

「はいはい、仲良し乙」

「「人の話聞いてない。コイツ！」」

アリアとキンジの仲良しツッコミを華麗にスルーした私は何かを

察した。
自分で言うのもアレだけど私の気配察知能力はもう人外レベルらしい。
それも武偵・傭兵等の戦闘職に就く人の気配察知能力のランキングでも第2位だってさ。
因みに世界最高峰、第1位の座は高天原ゆとり先生である。
あの人に敵う奴はそうそういないだろう。……シャーロック・ホームズを除いて。
……そんな事自慢してる場合じゃなかった。
早よ行動しないと瑠璃にどやされる。
「……！　伏せて」
「え……？」
「早く！」
二人の頭を掴み跳び箱の影に伏せる私。
華奢な体躯のＵＺＩから轟音と閃光を伴って射出された無数の銃弾は、右螺旋回転を維持して虚空を斬り裂いていく。
それらは宛ら、意志を持ったかのように存在を主張して累乗数的に撒かれる弾幕であり、同時に致死性の暴力であり――対象を穿つ為にしか目的を持たない、傀儡だった。
弾幕の被害に遭い傷つく備品。（さすが防弾仕様。壊れてない）
「うっ！　まだいたのね！」
そう言ってホルスターからガバメントを取り出し応戦するアリア。
先陣隊で襲撃してきた7台を完全破壊する。
「凪優、あと何台いるの？」
「あと、３３台かな。さっきのは牽制用みたいだし」
「そう。凪優の方の銃弾のストックは？」
「大丈夫。まだ余裕あるわ」
「ＯＫ。アタシ一人だとこのままじゃ火力負けするから、第二陣以降のバックアップをお願い」
「了解」
そう返事を返し、アリアの方を見やる。

今、アリアはキンジの顔に胸を押し付けたまま応戦している。
無論、そのアリア本人は射撃に集中しており、気づいていない。
ああ、これアウトだ。アリアの胸の小さい膨らみでなってるな。キンジ。
そう、ヒステリアモードに……。
「強い子だ。それだけでも上出来だよ」
「は……？」
いきなり口調がクールになったキンジにポカンとしているアリア。
アリアのその気持ちはわからんでもない。
そして、ポカンとしているアリアをお姫様抱っこして倉庫の端まで運ぶ。
「ヒステリアモードになったんだね。キンジ」
「そっちのお姫様のおかげでね」
「そう……」
ヒステリアモード……。
それは遠山家に遺伝する特異体質。
正式名称はＨＳＳ、ヒステリア・サヴァン・シンドロームといい、性的興奮を感じると思考力・判断力・反射神経などが通常の３０倍にまで向上する。
その反面、魅力的な異性を演じて子孫を残す」　ことに由来してるため、『女性を高い知力と身体能力で守り女心を鷲掴みにするカッコいい男性』になる。
この説明はあくまで『ノルマーレ』の方。
派生もあるらしく、それによって全部変わってくるらしい。
さて、私の方もなりますか……。
「瑠璃」
「〈解放具合は？　〉」
「第２段階……かな」
「〈んじゃ、タロットの方宜しく〉」
「来れ（アデアット）、力（Ｓｔｒｅｎｇｔｈ）、戦車（Ｔｈｅ Ｃｈａｒｉｏｔ）、死神（Ｄｅａｔｈ）」
発動させたタロットが眩い光を放ち、私の容姿が瑠璃色のロングへ

アー、唐棣色の瞳に変化する。
先程の第1段階と違い瞳の色も変化している。
この状態だと瑠璃の能力を5割くらい引き出すことができる。
「いくよ。キンジ」
「おや。そっちも瑠璃姫になったのかい？」
「ホント、この姿をそう呼ぶのってアンタだけよね」
「これは失礼。で、どうするんだい凪優？」
キンジの物言いに苦言を呈する私を物ともしないヒステリア・キンジ。
「無論、全制圧。但し、セグウェイ自体は破壊せずに」
「これはまたハードル上げるね。狙いどころは？」
「セグウェイにあるスピーカーの下。そこにある後付けの制御チップ」
「ＯＫ。では、お掃除……いや、お片付けの時間だ」
「そうね。スタート」
私の発した言葉の合図にしたかのようにセグウェイは二手に分かれ、キンジに7台。私に２６台。
「たまっちりしていってね！」
そんな合成音声と共に私に向かって一斉射撃してくる。
全く、どんだけ警戒されてんの。
あと、さっきの「上沼垂（かみぬったり）」とは違って「田町」になってるし東京都内にはなったけども。
「語呂が悪すぎるっつーの」
私はそう言ってホルスターからマテバモデル６ウニカ（セイ）を取り出す。
マテバモデル６ウニカ
イタリアのマテバ社が１９９６年に開発した半自動作動方式の回転式拳銃である。
その独特の機構から、「オートマチックリボルバー」とも呼ばれる。
回転式拳銃としては部品点数が多く、構造が複雑で、製造コストが高いものとなった。更に、可動部分が多いため、より砂塵や汚損に弱い……という問題点はあるものの、私のお気に入りの拳銃である。

「舞え、銃弾よ」
私はセグウェイのマイクロＵＺＩから発射された銃弾が弾かれて制御チップに着弾するように銃弾を撃ち込む。
私の撃った銃弾が壁の役目を果たし、相手の銃弾はＬ字型に１回ないし２回反射されて制御チップに着弾し制御チップ破壊後、更に跳ね返り速度が加速され、次の制御チップを破壊する……。
この一連の動きが６連鎖する。要は
「銃弾撃ち（ビリヤード）」→「跳弾射撃（エル・スナイプ）」＆「二重跳弾射撃（エル・エル）」→「加速（アクセル）」→「連鎖撃ち（キャノン）」
の繰り返しで暫く銃弾同士がぶつかり合っていたが、それも静かになる。
「（´―、）フゥー… ざっとこんなものか……」
「〈お疲れ様、凪優。大体使い方わかってきたんじゃない？ 〉」
「そうかな……？ だといいのだけども」
「〈もう、持続時間限界だし元に戻って。私は休眠に入るから。〉」
「はいはい。ＯＫ」
そう言った後、銀髪セミロング・紅い瞳の姿に戻る。
「さて、キンジの方も終わったよね？」
「当然だよ。もう終わったよ」
「そらそうよねｗｗｗｗ私のほうが圧倒的に台数多いし」
「それでも関係ないだろう？ このくらい」
「まぁ……ね。キンジの方はどうなのよ。実は結構やばかったり……？」
「このくらいどうってことないよ。アリアを守るためならね」
「あら、私は対象外なのね……（´；ω；、）」
「相棒として信頼しているのだから許して欲しいな」
「仕方ない。じゃあ許す」
「それは良かった」
何時も見たく私とキンジ（ＨＳＳ・Ｎ）が会話している様子までをアリアは跳び箱（防弾）の中から上半身を出した状態で
「（○口○＊） ポーカン」
という表情をしていた。

おそらくアリアは今頃
「今、あたしの目の前で何が起きたの？」
と思っているであろう。
アリアはキンジと目があった瞬間、睨み目になってモグラ叩きの土竜みたいに跳び箱の中に引っ込んでしまった。
「あー……。これはキンジが悪いかな。たぶん」
そう思っていたら、アリアとキンジの痴話喧嘩が始まっていた。
私？　私は完全に蚊帳の外ですが。何か？
だから、暇ったらありゃしない。
突っ込みどころがあれば突っ込むだけしかないもの。
「―お、恩になんか着ないわよ。あんな玩具くらい、あたし1人でも何とか出来た。これは本当よ。本当の本当」
……ちょいと待とうか、アリア？
1人で33台捌ききるて、フツーの人間だと無理だかんな？
私だって瑠璃の能力借りた状態じゃないと無理だって状態だし。
つまり、人間辞めなきゃいけないんですけど？
わかってる？　そこらへん。
と、私が内心勝手にツッコミしている間にもアリアとキンジの喧嘩は続く。
その最中、アリアは度々跳び箱の中に入ってはスカートを直していた。
あぁ……。多分スカートのホックが壊れたんだろう。
文にセグウェイの引取り要請するついでにアリアの制服のスカートの替えを手配しておこう。
確かアリアの身長は142cmだったっけ……。
私が文に連絡終えた後もまだ喧嘩は続いていた。
何時まで続くんだよ。ホントに。
そう思っていたら、キンジはアリアが中学生だと言いやがった。
……Ｗｈａｔ？（。Д。≡。Д。）
「あたしは中学生じゃない!!」
アリアは地団駄で木製の体育倉庫の床を破壊していた。……

怖っ。
流石の私でもそこまではやらない。ヒメじゃあるまいし。
「悪かったよ……。インターンで入ってきた小学生だったんだな」
……。／（^ o^）＼
私はキンジがもうどうなったって知らん。だってキンジの自業自得だし。
その言葉で当然怒りメーターが振り切れるアリアはガバメントを再びホルスターから取り出し、発砲した。
……逃げよう。三十六系逃げるに如かず。逃げるが勝ち……って、私無関係だけど、何故に追いかけられてるの!?
「アンタは事実を知っていながらも言わなかったから同罪よ！」
あぁ、なるほど……ってなるわけないじゃん！
なんでや！　理不尽すぎる！
「じゃあ、ここは任せたよ。相棒」
そういって、先にこの場から退却するキンジ。
「え、ちょ、おま……」
ふざけんな!!　元はといえばキンジ（てめぇ）が蒔いた種だろーがよ!?
だったら責任持って収穫までしやがれって!!
「まずはアンタから片付けてあげるわ！　覚悟ぉ！」
鬼のアリアが迫ってくる。
「瑠璃いいいいいいいい、助けてぇぇぇぇ!!」
お休み中の神（相棒）に思いっきり助けを求める私。
これが、私・水無瀬凪優と遠山キンジと神崎・H・アリアの最悪な出会い。
この結末はというと、瑠璃をなんとか目覚めさせて対処した御蔭様で私は今直ぐにでも休みたい半端ない疲労感に襲われるのであった。

第００４弾　その後の新学期の朝

なんとかアリアを対処して全力で逃げてきた私を待っていたのは教務科の報告からの始業式出席である。

始業式が終わって新しいクラスである２年Ａ組の教室の自分の席で見事に死にかけ。つまりは超疲労困憊状態な訳だ。

それは私に宿る瑠璃も同様の状態で、持続限界で能力回復の為に休眠していた所を無理矢理叩き起されて再度能力を行使したのだから。それもあって、今はかなりの不機嫌な状態で休眠中である。

私が机で死にかけていると、同じクラスの女子生徒が話しかけてきた。

彼女の名は峰理子。探偵科所属でランクはＡ。

高ランクでありながらも探偵科Ｎｏ．１のバカ女。

そんな『バカ』と悪名高い彼女が高ランクであるのは情報収集力の高さにある。

情報を扱う専門学科の情報科所属である私でも適わない程だ。

私的に改造した制服（本人曰く、スイート・ロリータと言うらしい）が特徴的だ。

これは私の勘だが、その制服にはなんかパラシュートでも仕込まれてそうな感じはする。

理子のどこがいいのか私にはさっぱり知らないがファンクラブもいるらしい。

私が理子と知り合ったのは、４対４戦にて同じ班で組んだからである。

あの時は同じく、班を組んだ綾瀬悠季、三嶋絢香と共に史上最速の時間で勝利し、伝説になったりもした以降、なんだかんだで友人となった。

「なゆなゆ……えっと、大丈夫？」

「理子は私のこれが大丈夫に見えんの？」

私は疲労による不機嫌さマシマシで答える。

「うん。少なくとも理子の目にはそう見えない。一体どうしたの?!」

理子はえらく驚愕した表情を見せ、此方に問いかけてきた。
「結果を端的に言うとさっきの事件で限界超えた」
「『さっきの事件』ってグラウンドと体育倉庫で起きた自転車爆破事件の事だよね？」
「そだよ……」
「でも……報告書見る限り、なゆなゆが瑠璃神（るーりん）の能力使ったとしても限界超える事なんて無いとりこりん的には思うんだけど」
「１人で瑠璃の補正もなしに全部で８６台のＵＺＩつきセグウェイの相手って無茶言わないでよ」
そんなに相手出来るのは人間辞めている化物だけだ。
「だって……なゆなゆってさ、補正抜きでも超偵……『超々能力者（ハイパー・ステルス）』の部類に入るじゃん」
「確かに私はＧ２０叩き出してるけども、その分持続がもたないって」
「じゃあ……どっちにしろるーりんの助け要るんだね。でもさ～」
何か納得した表情をしていた理子だが、次なる疑問点を口にした。
「今度は何よ……」
「るーりんの補正アリだとＧ２２～２６まで高められるから、余計に限界超えるとか有り得ないと思うんだけど……」
「あー……うん。事件自体は限界超える事はなかったんだけどね……その事後で超えた」
「『事後』って何さ?!」
何やら（意味深）な語句を私が口にしたことによって理子は案の定というか食いついた。
「言いたくもないし、思い出したくもない。取り敢えず、理子。頑張った私を労って」
「あー、ゴクロウサマ」
あんな理不尽な地獄の追いかけっこ（物理）なんて記憶から抹消したいので、理子からの言及には黙秘権を行使する。
その代わり？　私は理子に『頑張ったから褒めて（要約）』と要求。
私の要求に色々と察した理子は同情も込めてか優しく労ってくれた。

「ありがと。あと、ＨＲ始まるまでそっとしてくれると助かる」
「うー、（〉Д〈）ゝ〝ラジャー!!」
「静かにしてろって。マジで。新学期早々氷漬けになりたいの？」
疲労困憊な私は休める時間が短くなることにイラついて五月蠅い理子を脅迫で黙らせた。
「うん。それは勘弁して。絶対に。じゃあ、ＨＲ始まる直前位に起こすから」
「あー……うん。お願ｇ……ｚｚｚ」
過去のＴＯＲＡＵＭＡを発症したのか青褪めた表情で全力で氷漬けを拒否する理子。
理子の言葉を傍目に聴き『お願い』と返答を言い切る前に私は眠りに着いた。
ぶっちゃけ言葉を言い切るのも辛いくらいに私の体力は限界だったのである。

それから暫くして。
「なゆなゆー？　起きて。ＨＲ始まるよ？」
理子に身体を揺さぶられて起こされる私。
「んぁ……。ありがと、理子」
「くふふ。どーいたしまして」
起こされてからしばらくすると、担任の高天原ゆとり先生が教室に入ってきて
「うふふ。じゃあまずは去年の３学期に転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらっちゃいますよー」
と話していた。
え……？
『去年の３学期に転入してきたカーワイイ子』
だってえ……!?
うわ、嫌な予感しかしないんですけど……。
多分キンジもそう思ってるわ……。
こういう時の私の『嫌な予感』は必ずと言って的中する。

案の定、その生徒はアリアでした。
先程、一悶着あった神崎・Ｈ・アリアさんでした。
一番会いたくない奴に会ってしまった……。
「超サイアクだな（；；∀；）」
ＨＲが始まって実体化していた瑠璃――こと、三嶋花梨は苦笑気味に私を同情していた。
「ホントにねぇ！　こんちくせう！」
私は涙目でＨＲの迷惑にならない程度に叫んだ。
あぁ……今すぐ寝たい。もう一回寝たい。ガチで。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」
キンジが椅子から転げ落ち、私が机に頭を打ちつける。タイミングはもう同時。寸分狂わず。息ピッタシ。
な、ナニイッテンノ……？
「動揺しまくってんじゃんか……」
あまりの動揺っぷりに花梨は呆れていた。
そら、するわ！　しないほうが可笑しいでしょ!?
「よ……良かったなキンジ！　なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！　先生！　オレ、転入生さんと席代わりますよ！」
『うわ、空気読んだのに余計な事だというのは』
的な男子生徒。
彼の名は『武藤剛気』。車輌科（ジ）の優等生。乗り物と名のつくものなら何でも乗りこなせる奴で私の友人その３である。
武藤の申し出にアッサリ快諾のゆとり先生。
先生、そこは拒否ってくださいよ。
そして、教室は拍手喝采。
……煩い。こっちは疲労Ｍａｘなのに。
「キンジ、これ。さっきのベルト」
アリアはいきなりキンジを呼び捨てにして、さっきキンジが貸したベルトを放り投げ、キンジがベルトをキャッチする。
「理子分かった！　分かっちゃった！　―これ、フラグバッキバキに

立ってるよ！」
私の左隣の理子が勢いよく席を立ち、そして安定の『りこりんタイム』がスタート致しました。
『うわ。マジ関わりたくねえ……』
が内心の私と花梨を差し置いて『りこりんタイム』に便乗するクラス全員。
……ということはだよ？
バカ騒ぎ開幕
この結末が待っている訳ですよ？　ＨＲ差し置いて。
『新学期早々シンクロ率高いな！　あなた達ぃ!?』
などと、ツッコミながら内心この状況にちょいとイラッと来ている私である。
ゆとり先生もゆとり先生で
「早くこの状況鎮めてね（ニッコリ」
と言わんばかりに私と花梨に殺気を飛ばしている。……なんでや。
「な、なんでゆとり先生に殺気向けられなきゃいけないの～!?」
と涙目の花梨。
うん。今の花梨は流石に理不尽すぎる。
皆、ゆとり先生の濃密な殺気をさっさと察しろ!!!　（懇願）
その時だ。
突如として．４５ＡＣＰ弾の奏でる轟音に、クラス中が凍てついた。
無論、何をせずとも発砲されることはほぼ無いに等しいのだから、必ずしも、物事の濫觴には原因があるわけで。
今回のそれは、神崎・Ｈ・アリアだった。二丁拳銃のガバメントを、抜きざまに発砲したのである。
なんて苦笑している暇もなく、．４５ＡＣＰ弾特有の轟音が耳を劈き、その銃弾が私に向けて飛来してくる。
それを、もののついでに傍らにあった防弾仕様の下敷きで防いでそのまま軌道を逸らして、これまた防弾仕様のゴミ箱にホールインワン

させてから、私は
『さて、どうしようか――』
と考えを巡らせた。
というのも、このアリアの一連の行動。私を激昂させるのにはこれ以上ないほどの愚行であるからして……。うん、決めた。そうしよう。
人知れず口の端を歪める私にアリアは興味を示さず、それでも眼中にはあるが、といったかのように訝しげな表情を浮かべてから、頬を紅潮させて、宣言した。
「れ、恋愛だなんて――くっだらない！」
少なくとも、クラス中の恋愛観を否定するような言動で。
「全員覚えておきなさい！　そういうバカなこと言う奴には――」
ひと呼吸おいて。
「――風穴空けるわよ！」
……さて、ここらへんでいいかな。
そう胸中で呟いてから、私はアリアの腕を掴む。刹那、アリアの表情が緊迫したモノに変わったことは言うまでもない。
へぇ、これだと予見できてたように感じるなぁ。してたのかな。
まぁ、そんなことはいいや。
「ねぇ、アリア」
「……何よ」
「お話……しよっ♪」
『お話、しよっ』……って何よ？　凪優……目！　目が笑ってないわよっ！」
「そんなことはいいからいいから。さっきのお返しも兼ねて、ね」
アリアの必死な抵抗も虚しく、まぁ私が免罪符、慈悲、贖罪なんて与えるわけもなくて。問答無用だ。コノヤロー。
胸中で毒を吐いて、ズルズルと強引に引きずりながら、強制連行だ。
「ちょっと、アンタたちっ……！　助けなさいよっ！」
アリアはクラスメートたちに助けを求めるものの、誰一人として傍観しているだけだった。そんなに面倒事に巻き込まれたくないのか。

しかも合掌してる奴までいるし。どうなってんだよこのクラス。
「ほら、アリア。行こっ？」
――そうして、水無瀬凪優がアリアを強制連行した数分後。アリアの断末魔に等しい叫びが響き渡ることになるのだが。
それを少なからず耳に入れたクラスメートたちと張本人であるアリアは、水無瀬凪優を怒らせたらマズイのだ、と改めて認識したのだ。
続くんだよ

第００５弾　凪優とキンジとアリア

まるで怒涛の嵐のような――実際にそうであった学校が終わり、放課後。

キンジと私はアリア絡みの一件による精神の疲れもあってか、寮の自室で休んでいた。

アリアからの逃亡のために叩き起された花梨は不機嫌極まりなく自室で明日の朝まで休眠中である。

『何ともご苦労さんだ』

と私は胸中で小さく労った。

・・・といいつつも、実際に休んでいるのはキンジだけである。

私はリビングで、私は探偵科（インケスタ）・鑑識科（レピア）から情報科（インフォルマ）に回ってきた、今朝の爆弾事件の教務科提出用資料を纏めていた。

そうして詳細を目に通していく。それが中頃まで過ぎた頃だろうか。おもむろに、キンジが口を開いた。

「なぁ、凪優……」

「ん？　どうしたの？　キンジ」

「今朝の事件について凪優はどう思ってるんだ？」

『『どう』って言われても……ノーコメントかしらね」

「ノーコメント？　どういう事だ」

キンジは訝しみ、眉を顰める。

「だって犯人の目的・意図が不明だから。何もかもが不明。だからノーコメント。そういうキンジはどう思うのよ？」

「俺は……武偵殺しの模倣犯は爆弾魔かなって思ってる」

「爆弾魔か……」

「ああ。今朝の犯行の手口からしてそう考えるのが妥当だしさ」

「成程ね……」

――ピンポーン。

なんかチャイム鳴ってる気がするが、無視だ無視。まだ宅配業者来る時間じゃないし。

「……？　どうしたんだ？」

「え、あっ……あはは。何でもない。続けて？」
　キンジがこちらの挙動に疑問を抱いたが気のせいだから、と流させた。
「あ、ああ。……そうなれば」
「『そうなれば』……？」
「たまたま運悪く俺のチャリに仕掛けられたものと証明できる」
「『たまたま』で仕掛けないでしょ。幾らなんでも。爆弾魔だって狙い目絞ってるでしょうよ。それに対象がチャリて、みみっちくない？爆弾魔にしては」
　――ピンポン、ピンポーン……。
　誰か悪戯で連打してる阿呆がいるのだろうか。こんなもん無視だ。
「じゃあ俺個人を狙ったものと言いたいのか？　凪優は」
「まぁね。なんの恨みで……というか恨みが動機さえも不明だけどね」
　――ピポピポピポピポピピピピピピピンポーン！　ピポピポピンポーン！
　インターホンは『太●の達人』じゃないんだよ？
　なんでそんな連打するんだよ。
　そんなに連打したってハイスコアなんて存在しないのに。
　うるせぇんだよぉ!!
「正解は越●製菓!!」
　じゃねぇんだよ!!何もかも不正解だよ、こん畜生がぁ!!
（＃＃。Д。）イライラを必死に理性で抑えつつ、私はソファから立ち上がり玄関まで数歩を数えてから、ドアを開けた。
　直後、彼女の視界に入ったのは――記憶に真新しい、一人の少女。
「遅い！　あたしがチャイム押したら5秒以内に出ること！」
「無茶言うなって……。ラピュタより短いのは有り得ないし、そして住人が出てくるまで待つの。それフツーだし一般常識」
　とんでもない事言い放ったアリア（バカ）に正論で返す私。
「なによそれ……って、げぇ凪優!?」
「人を見ていきなり『げぇ!?』はないんじゃないの、アリア!?　失礼に

も限度があるんだけど。それともう一回ＯＨＡＮＡＳＨＩする？
私は一向に構わないのだけど」
そう、神崎・Ｈ・アリア。朝のホームルームでの問題児であるから
して、最終的には凪優に〆（シメ）られたのだが……どうやら、トラウマには
なっているようで。アリアは小さくたじろぐと、
「ごめん、それだけはマジで本当にやめて。えっと……話は変わるん
だけど、トイレどこ？」
「トイレなら右手の２番目の部屋」
「そう、ありがと。あとキンジ、居るんでしょ？　トランクを中に運ん
どきなさい！」
礼を手短に言って小走りにトイレに入るアリア。かと思えば、リビ
ングにキンジが居ることまで察知したらしく入りざまに叫び捨てた。
それを聞いたのか、キンジがリビングから歩いてくる。
「おい、凪優。勝手に神崎を家に入れるなよ……」
「あぁ……ゴメン。ノリでついつい迎え入れちゃったわ。そうそう、
キンジもアリアのこと下の名前で呼んだほうが良いわよ」
「ノリで行動するなよ……。ってか、『トランク』って、どれの事だよ
……」
「あれの事じゃないの？」
そう言って私は玄関先に鎮座する明らかなブランド物のロゴ入り
の小洒落たストライプ柄の車輪付きトランクを指差した後、そのまま
手をひらひらと翻しながら平然と告げた。
「ちょっと、作業も進めなきゃだし部屋戻るわ。何かあったら呼んで」
「あ、ああ……」
そう言ってキンジと別れ、リビングにある資料を取りに行って自室
に戻る。
えっと……今朝の爆弾事件の報告書上がったら、次は戦姉妹（アミカ）制度と
クエスト関連の資料制作だっけか。まさか、戦姉妹（アミカ）制度の生徒側主任
――という名の副監督に就任するとは思わなかった。
それに加えクエストの受注受け取りとランク毎に分類・開示する作
業も頼まれるとは思わなかった。私、この年齢で早くもワーカーホ

リックになりつつある現状である。
だが、文句を言って仕事が減るわけでもなく寧ろ増えそうなので、ここは頑張るとしよう。

暫く作業に集中して……ようやく一段落したのでデスクで背伸びを一つ。
そして時計を見る。デジタル方式の電波ソーラーの時計の時間は、16時42分を表示していた。
「もうこんな時間か……」
そう呟きリビングに向かう。もうそろそろ宅配業者が来る頃だろうしね。
私がリビングに到着すると、アリアは窓周辺を陣取るなり――
「キンジ、凪優。あんた達、あたしのドレイになりなさい！」
――私とキンジがアリアの奴隷になれという爆弾発言を行った。
その言葉に思考停止する私（とキンジ）。
……え？　は？　ドレイ??　……ありえない。パートナーならまだしも、何故に奴隷なん……。
もういいや。考えるのは止めた。
考えれば考えるほど鬱になってきそうだ。
だから……思考放棄でいいよね。うん。
「ほら！　さっさと飲み物くらい出しなさいよ！　無礼なヤツね！」
無礼者はどっちなのよ……。全く。そして客人が偉そうにするんじゃねぇ。イラッと来るんだよ。
「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！1分以内！」
更に私のイライラが募るようにアリアの無茶振りである。
「1分以内って無茶言うなって」
私は怒りを通り越して呆れの境地だったので、大きな溜息を吐きつつ、口を開いた。
「何でよ!?何か文句でもある訳!?」
私の言葉に不満だったのか、アリアが喰ってかかる。

「カンナが今切らしてて宅配便が来ないと無い。あと、豆挽く所からするから1分以上かかる」
「あ、そう。じゃあなるべく早くね」
私のぐぅ正論にイマイチ納得していなかったようだけど、一応納得して引き下がるアリア。
――ピン、ポーン……。
「宅配便でーす」
そして、それを見計らったかの様に来る宅配便である。
「はーい」
デフォな返しをしつつ、リビングから玄関に向かう私は扉を開ける。そこには19歳くらいだろうか。そんなに私と年齢は離れていない女性配送員が居た。
「こちらにハンコかサインを……」
宅配便のおねーちゃんは受取伝票の記入を私に求めた。
「あ、はい」
受け取り受諾の記入箇所に、玄関に備え付けていた『宅配便受け取り専用の判子』を押す。
「毎度ありがとうございました！」
「ご苦労様ですー」
荷物を私が受け取り、ベターな挨拶を交わした後、宅配便のおねーちゃんは去っていった。
「じゃあ数分待ってて。アリア」
ズッケロ・ディ・カンナ（zucchero di cannna）（キビ糖）の業務用袋が入った段ボール箱を抱え、キッチンに向かう私は一応、アリアへと了承の意を確認しておく。
「うん」
アリアの了承得たし、早速作るとしよう。
アリアは「通常の2倍程度の大量の水で抽出」する『エスプレッソ（Espresso）』か、「通常の2倍程度の量の豆を使用」する『エスプレッソ（Espresso）ルンゴ（Lungo）』か、『ドッピオ（Doppio）』がご所望だったな。
……よし、今回はドッピオの方にしますか。

先ずは豆の準備だ。
今回は「アラビカ種６・ロブスタ種４」の配合率な『クィートエスプレッソバー』にしよう。この豆はクレマたっぷりの濃厚でしっかりした味わいが特徴だ。
この種類は『フルシティーロースト』と呼ばれる焙煎が成されている。
『フルシティーロースト』。
この焙煎は酸味がなくなり、焦げ臭さも強くなるのが特徴である。『炭火焼珈琲』に使用される豆と同じ程度の焙煎度といえば解るだろうか。
豆が決まったら、次は豆を挽く作業に移る。エスプレッソを淹れるにあたってこの『豆を挽く作業』が一番重要なのだ。
この作業で完成品のエスプレッソの味が決まるといっても過言ではない。
『グラインダー』呼ばれる機械で豆を挽いていく。今回淹れるのはエスプレッソだから、粒子の大きさが白砂糖程の大きさになる『極細挽き』が良いだろう。
豆を挽き終わったら、粉が新鮮な状態なうちに、エスプレッソマシンの『ポルタフィルター』と呼ばれるフィルターに詰める『ドーシング作業』。
詰め終わったら、ホルダーの側面を軽く手の平で叩き、粉を水平に慣らすという『レベリング』作業だ。
慣らしたら、『タンピング』という作業に入る。
『タンパー』と呼ばれる重しでホルダーの上から真っ直ぐに力一杯押す。
タンピングが終わり、ホルダーのヘリに付着している余分な粉を綺麗に払い、エスプレッソマシンの抽出ボタンを押して湯通しをしておく。
湯通しが終わったらホルダーをマシンに優しくセットする。
優しくセットしないと今までのタンピング作業が水泡に帰す事になるので、注意せねば。

ホルダーの下部にカップをセットし、マシンの抽出ボタンを押す。
ボタンを押して４～５秒位でとろりとした液体が出始め、徐々に濃い茶色だったものが淡い茶色になっていく。
大体、ボタンを押してから３０秒後、抽出が完了し、『エスプレッソ・ドッピオ』の完成だ。
完成したエスプレッソに「ズッケロ・ディ・カンナ（zucchero di canna）」を添えてアリアの下に配膳する。
「ほい。お待たせ。エスプレッソ・ドッピオね」
アリアは差し出された『エスプレッソ・ドッピオ』を受け取り、口にする。
「ありがと・・・・・美味しい。凪優は淹れるの上手いわね」
私の淹れた珈琲はアリアに大絶賛だったようだ。
「まぁ、毎日コーヒー淹れてるしね。貴族様の口に合って良かったわ」
私もそう言って、先ほど淹れた珈琲を口にする。
「なぁ、凪優、何でアリアが貴族だって解るんだ？」
キンジが珈琲カップ片手に私に尋ねた。
「まぁ、以前調べたことあったし。あと雰囲気」
「ねぇ・・・二人共」
私とキンジの会話を遮るようにアリアが発言した。
「どうしたのよ、今度は」
「おなかすいた」
アリアの言葉に私は時計を見る。壁の時計の時刻は１７時４６分だった。
「あー、もうそんな時間だっけ。今から作るわ。夕食」
私は夕食を作るべくキッチンに向かう。
「ねぇ・・・・」
キッチンに向かう私をアリアが呼び止めた。
「今度は何？」
「凪優ってももまん作れる？」
「え、ももまん？そりゃ、作ったことあるし作れるけど……」
「じゃあ、あたしそれ食べたいな。作って」

「はいはい。じゃあ今日は中華かしらね？」
私は返事をし、キッチンに向かった。先ず、ももまんから作ろう。
だって発酵に1時間くらい要すし。ももまんの材料は……っと。

薄力粉　　１００ｇ
ドライイースト　１ｇ
砂糖　　１０ｇ
水　　５０？
餡（蓮の実餡）　２００ｇ

が、４個分の分量で今回は４００個作るから……

薄力粉　　１００００ｇ（１０ｋｇ）
ドライイースト　１００ｇ
砂糖　　１０００ｇ（１ｋｇ）
水　　５０００？（５Ｌ）
餡（蓮の実餡）　２００００ｇ（２０ｋｇ）

この位の分量で良いんだよな。
今回はアリアもいるしこれくらい作っとけば十分かなとは思う。
さて調理に取り掛かろう。
先ずはふるった薄力粉、砂糖、ドライイーストに水を少しずつ加え、生地が滑らかになるまでしっかり捏ねたら次に４００等分にして薄く広げた生地に４００等分にして丸めた餡を乗せて、桃型に包む。
この作業が私は結構楽しくて、至福な時だったりする。
食用色素等（分量外）で薄く色を付けてから霧吹きをして、１時間ほど発酵させておく。
発酵させてる間に他の料理を作ることにしよう。
今日のメニューは
『麻婆豆腐』
『玻璃蒸蝦餃（広東風　海老蒸し餃子）』

『小籠包』
『中華ちまき』
『胡椒餅』
『棒棒？』
『青椒肉絲』
『乾燒蝦仁』
『酸辣湯』
『杏仁豆腐』
『芒果布丁』

それにももまんである。
かなりの品数だが、私にとってはどうってことない。
過去にこれより多い満漢全席を一人で作ったことあったからね。
ただ問題があって……コンロが２つだと捌ききれない。なので、あの手を使う。
私はキッチンのガスコンロ横にある部屋の扉を開く。
その部屋にあったのはガスコンロ４６個。ただそれだけである。
そう。この部屋は名付けて『ガスコンロ部屋』という。
この部屋は当初はなかったが、依頼報酬でタダで増設してもらったのだ。
因みに、それと同じく依頼報酬で『燻製部屋』と『石窯部屋』と『冷蔵庫部屋』と『発酵部屋』も増設してもらった。
今回は『発酵部屋』と『ガスコンロ部屋』と『冷蔵庫部屋』を駆使して夕食を作ろうと思う。
さて、ここからが本番だ……。

調理開始から1時間半後に全てが完成し、夕食となった。
ただ……あまりにも作り過ぎてしまった為、とてもじゃないが４人で食べきれる気がしない。
なので困った私は親交の深い知り合いを片っ端から呼んだ結果、
葵・理子・白雪・悠季・絢香・瑠樺・凛花・武藤・不知火・文ちゃん・優梨愛・あかり・志乃ちゃん・ライカ・麒麟ちゃん・湯湯ちゃん・

夜夜ちゃん・陽菜ちゃん

そして呼び行く途中に捕まって蘭豹・綴・ゆとり先生が御相伴になることが決定した。

そして、皆で私が作った満漢全席を奪い合いになりながらも大いに楽しんだ。

余談だが、アリアは1人でももまんを１００個食べていた光景に皆がドン引きしたのは今日ここだけの話である。

続くんだよ。

第００６弾　凪優とキンジとアリア@Ｎｉｇｈｔ

「……ていうかな、『ドレイ』ってなんなんだよ。どういう意味だ」
キンジがアリアに衝撃発言についての真意を問うた。
「強襲科（アサルト）であたしのＰＴ（パーティー）に入りなさい。そこで一緒に武偵活動するの」
「……要は『パートナーになれ』ってこと？　……なら、私は別に構わないけど」
アリアの『ドレイ宣言』はパートナー申請だった。そうならそうと言ってくれればいいのに。
私は特に断る理由も無いしアリアの依頼を受ける事にした。
個人的にはコッチの方が都合いいからね。『緋弾』関連でな。
「ホント？　引き受けてくれるの？」
「ええ。嘘はつかない。別に強襲科（アサルト）で他のＰＴ（パーティー）に加入する予定はないし」
「ありがと。……で、キンジの方はどうなの？」
私が引き受けたことでアリアは底なしか嬉しそうだった。
過去に『独唱曲（アリア）』と呼ばれたことも絡んでいるのであろう。
続いてアリアはキンジに対して返答を尋ねた。
「何言ってんだ。強襲科（アサルト）がイヤで、武偵高で一番マトモな探偵科（インケスタ）に転科したんだぞ。それにこの学校からも、一般の高校に転校しようと思ってる。武偵自体、辞めるつもりなんだよ。それを、よりによってあんなトチ狂った所に戻るなんて―ムリだ」
忘れているのか、キンジよ。私も（情報科（インフォルマ）と兼科の）強襲科（アサルト）所属なんだけど？
まぁ、強襲科が『トチ狂った所』に関しては全否定できないけど。
「あたしにはキライな言葉が３つあるわ」
「聞けよ人の話を」
「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。この３つは、人間の持つ可能性を自ら押し留める良くない言葉。あたしの前では二度と言わないこと。いいわね？」

キンジの主張は何処へ行ったやら。
お構いなしにアリアは自分の要求を叩きつけると同時に87個目のももまんをはむっと食べて、指についた餡を舐め取った。
しかし、アリアの食べっぷりは見事だ。
こうも美味しく食べてもらえると作り手の冥利尽きるって物よね。
「キンジのポジションは—そうね、あたしと一緒にフロントがいいわ」
「私は……？」
キンジがPTに加入した前提で話を進めるアリア。
その最中に私の名前がなかったのでアリアに自分のPT内のポジについて尋ねてみる。
「凪優は……臨機応変にかしらね。だって未知数すぎるもの」
「なるほどね」
アリアの返答に納得する私の横で
「よくない。そもそもなんで俺なんだ。凪優でいいだろ？」
納得が行っていないキンジだった。あと、他人の許可もなし生贄にすんじゃねぇよ。氷像にして差し上げるぞっ☆
因みに『フロント』……『フロントマン』とは武偵がPT（パーティー）を組む際における前衛のことで、負傷率が断トツに高い危険なポジションである。
「太陽は何故昇る？　月は何故輝く？」
例えの類なんだろうが、アリアの話は飛躍してるなとは個人的には思ったりしている。
「キンジは質問ばっかりの子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報を集めて推理しなさいよね」
それについては子供みたいなりのアリア（あんた）だけには言われたくないな。
「うん。まったくもって同感だと思う」
夕飯後、自室で寝ていたはずの花梨が不機嫌そうに部屋から出てきた。
「あれ？　寝てたんじゃなかったの、花梨」
「うん。だけどキンジが五月蝿くて眠れなかったの」

花梨の告白に
「キンジ……人の安眠妨害するのはどうかと思う」
私は呆れた様に言うと、
「なんで俺が悪いんだよ!?　そもそもこの原因はアリアだろ!?」
「ちょっと、なんであたしに責任転嫁してんのよ!?」
キンジとアリアの喧嘩が始まった。
『止めるの大変そうだなー』
なーんて、私が思っていたら。
「ねぇ、ケンカするんなら二人まとめて私が相手になってもいいんだけど……??」
花梨が激おこだった。本気の殺気飛ばしてるよ……。相当安眠妨害根に持ってるね？　コレ。
「「……スイマセンデシタ（ｏ・ω・、）」」
一瞬にして土下座のキンジとアリアにこの部屋が消滅せずに済んで安堵する私なのである。
仕切り直して話は再開された後、アリアの会話手法に気づいたキンジは対話手法を変えていた。なんというか、
『会話のキャッチボールが成り立たないのでこちらも要求を単刀直入に突きつける』
的な感じで。それ故かキンジの話す態度も少し横柄になっていた。
「とにかく帰ってくれ。俺は1人で居たいんだ。帰れよ」
……私はどうしろと？　私も出て行けと？
「今の場合は凪優は対象外だし気にしなくても良いと思うけど」
花梨の言葉に安堵する私は内心マジ焦っていた。
「まぁ、そのうちね」
「『そのうち』って何時だよ」
「キンジが強襲科（アサルト）であたしのＰＴ（パーティー）に入るって言うまで」
「でも今はもう夜だぞ？」
「何が何でも入ってもらうわ。私には時間が無いの。うんと言わないならー」
『私には時間が無いの』

……??
何か引っかかるな……。後で兄さんに連絡しておくか。
「凪優……どうかしたの？」
「え!?　私は大丈夫。花梨の方こそどうかしたの？」
「うん。今、私はとてつもなく嫌な予感がするんだけど……」
「奇遇ね。私もそんな気がするわ。花梨」
私と花梨の会話を尻目にアリアとキンジの言い合いは続く。
「言わねーよ。なら？　どうするつもりだ。やってみろ」
毅然とした態度で断り、煽るキンジ。
「ねぇ、凪優。キンジってもしかしなくても途轍のないバカなの？」
「言わないで。思ってても黙ってた方が良い事ってあるのよ」
私達の事はガン無視でアリアは大きな眼でぎろりとキンジを睨み、
「言わないなら、泊まっていくから」
私の中で考えうる最悪な答えを言い放ち、お泊まり発言を聞いた私は最早溜息しか出なかった。
それは花梨も同様である。
キンジは頬が痙攣を起こしたかのように引きつっていた。
「ちょっ……ちょっと待て！　何言ってんだ！　絶対ダメだ！　帰れ……うぇっ」
うおい！　何リバース（吐き掛け）してるの!?　汚いし、掃除も大変だし、するなよ!?
吐いたら吐瀉物もろとも凍らせて東京湾に沈めるからな!?
「凪優、超必死だね……」
「当たり前だ！」
花梨の指摘にガチで返す私。
なんとかキンジがリバース（吐）せずに済んだので一安心である。
「五月蝿い！　泊まっていくったら泊まっていくから！　長期戦になる事態も想定済みよ！」
と玄関のトランクを指さしつつ、キンジを睨みキレ気味に叫ぶアリア。
やっぱり宿泊セットだったのか。トランク（アレ）。

『だとすれば、やはりさっきの言葉の意図に答えが……？』
私がそう考えていたら、
「――出てけ!!」
部屋主のキンジではなく、アリアが何故かその台詞を発していた。
「な、なんで俺が出て行かなきゃいけないんだよ！　ここはお前の部屋か！」
「分からず屋にはおしおきよ！　外で頭冷やしてきなさい！　暫く戻ってくるな！」
再びアリアとキンジの喧嘩が始まっていた。
マジでいい加減に勘弁してくれないですかねぇ？
「どうにかしないの？　凪優」
「仕方無いか……」
そう言って私はアリアの背後に行き、首根っこを掴んで空き部屋にぶん投げた後にアリアがクッションに着地したのを確認し、その部屋の扉を閉めた。
「ちょ、いきなり何すんのよ！」
「黙れ。自業自得だ。てめーもそこでしばらく頭冷やしてろ。時間になったらそこから出してやる。いいな？」
「……はい」
私の怒気に気圧され黙るアリア。
「キンジもキンジで2時間ほど外出してこい」
そう言ってキンジに（キンジの）財布とケータイを投げ渡す。
「あ、ああ……」
釈然としない返事を返し、外に出るキンジ。
「……ったく。平穏グッバイとか勘弁してよ」
キンジを見送り、深い溜息をつく私を花梨は慰めていた。

続くんだよ

第００７弾　平穏なき夜　Ｓｉｄｅ＿Ｎａｙｕ

「ねぇ凪優、もうそろそろ依頼に出る準備しないと。　優梨愛ちゃんとの約束に遅れるよ？」
二度寝を終えた花梨が私に準備を促した。
「あっ、もうそんな時間か……。だったら、行く前に白雪にメール送っておかないと」
私はＳ研の授業が終わったであろう白雪にメールを送るべく、スマホを取り出す。
理由は簡単。私はこの後、作業やらなんやらでキンジとかの明日の飯の仕込ができないからだ。
その内容とは

今から行く依頼終了後に教務科に提出する依頼遂行仮報告書をゆとり先生の所に持って行く。
↓その後蘭豹と綴先生のおつまみ作り。
↓それが終わったらクエスト掲示板の更新作業と同時進行で依頼の依頼遂行報告書作成。
↓戦姉妹制度監督関係の書類作成
↓情報科で管理する武偵サイトとうらサイトの管理更新
であり、書類仕事中心に仕事が山積みである。
しかも期限〆切が似たような時期で重なっていて調整不可であるという理不尽さ。
下手すると今夜は『睡眠取れるだけ僥倖』といったレベルまである。
「……何気にワーカーホリックだよね。凪優って。まだ学生なのに」
花梨が私の考えを察したのか呆れた表情でそう言った。
「そういうのは言わない方がいいのよ。経験上。ま、胃薬が要らないだけマシだわ」
今のところ、胃薬を服用するレベルまで行っていないので助かっている私である。

「いや……それが基準なの……？」
私の判断基準が歪みまくった論に溜息の花梨。
「重要よ、結構。だってさ、結衣が居た時なんてさ……」
「待って、待って。愚痴なんか聴きたくないから、私。凪優は時間ないんでしょ！　白雪にメール送るんならさっさと送ったらどうなの？」
「むぅ……花梨、なんなのその言い草は。……言われなくてもわかってるわよぅ……」
私は花梨のあんまりな対応に不満を漏らしつつも白雪宛てにメールを作成する。
今みたいに明日の朝食が作る余裕が無い時にヘルプしてくれる白雪さんって、私的に超有り難い。
それを嫌な顔をせずに引き受けてくれる白雪はマジでネ申。＿ﾒ（。▽。＊）やわ。
全くもって『ゆきちゃん様々』である。

『〉白雪、S研の授業終わったの？』

私が一文メールを送信。

『〉うん。今終わったところ。どうしたの？』

すると、瞬時に既読が付いて、直様に白雪からの返信が来る。

『〉ちょっと今から依頼あってさ、明日の分の食事とか頼めないかな？と思って』

私も直ぐに既読してからの返信を送信。

『〉うんいいよ。明日の朝と昼の分でいいよね？』

先程の返信到着より早い今回の返信到着である。

文字数的に今回の方が多いのに返信到着が早いのは謎だ……。

『〉そうそう。その2食で大丈夫よ。何時もアリガトね、白雪』

私が日頃のお礼も込めての一文を送る。

『〉お礼なんていいよ。作って直接持っていこうかなって思うんだけど……』

と前回の返信より文字数が多い一文が前回より短い時間で来た。

文字数と返信時間の短縮が比例してるってΣ（。Д。）スゲェ!!わ。

『〉（。Д。）ゞ リョーカイ!! 今日はおつまみ作りやらなんやら有るから2時間くらい掛かるかも。それくらいの時間だと大丈夫かな』

少し長い文章を送る。顔文字付きで。

『〉わかったよ。今から2時間半後位に凪優ちゃんとキンちゃんのおウチの方に持ってくね。凪優ちゃん、お仕事頑張ってね！（#?|?）○

P．S．無茶したら絶対にダメだからね？ 無茶したら私……怒るよ（ニッコリ』

私の送ったメールと同じくらいの文字数のメールが顔文字付きで先程の返信より短い時間で送られてきた。

顔文字付きでしかもさっきより短い時間で送るとか白雪さん、マジでやりおるわ（；。Д。）！

あと、最後の追伸怖ぇよ!? 絶対に無茶だけはしないようにしよう。うん。

「凪優ー？ 遅刻したらシャレにならないよ？」

私のメールが中々終わらないので花梨の催促が入った。

「わかってるって、花梨。じゃあ行くか……」

私はメールの既読してスマホをしまい、リビングを後にする。
「うん！　あ、凪優、アリアに一声掛けておいた方がいいんじゃないの？」
リビングを後にする私の横でキッチリ腕をホールドしている花梨が私にアドバイスを送る。
「……そうね。そのほうがいいわね」
私は花梨の助言に従い、ぶん投げたアリアに一応声をかけておく事にした。
「アリア、少しは頭は冷えた？」
「……うん」
私の問い掛けに一言だけ帰ってくる。
私の機嫌を損なわぬように考えた結果だろう。きっと。おそらく。メイビー。多分。
「そう……。今から私は依頼があるから行ってくるから。その間にお風呂でも入っちゃいな」
私は伝言を手短に済ます。
「……わかった」
アリアから了承の返事が返ってくる。
「じゃあ行ってくるね」
「……いってらっしゃい」
アリアからの『いってらっしゃい』を聞いてから私はドアを閉めた。
「どうだった？　アリアの方は」
花梨が心配そうにアリアの様子を私に尋ねた。
「ま、大方大丈夫でしょ。時間経てば元通りよ」
私は『心配ない』と花梨に答える。
「そっか……そのままでいいのに」
花梨は不満げな表情だった。
言うてやるな。確かに私もそう思ったけどさ！
「いい加減に行きましょ？　依頼者待たすのは流石にマズイからね」
「そう……だね……」
私の言葉に花梨は頷き、優梨愛との合流地点へ向かった。

男子寮のガレージ前。
そこが優梨愛――柊（ひいらぎ）優梨愛（ゆりあ）との合流地点。
彼女は装備科・強襲科所属で私のパートナー。
それにイ・ウー研鑽派、『魔女連合』所属であり、私の同期でもある。
教授以外に『錬金術』を扱える数少ない人材であり、『錬金術士（アルケミニスト）』の異名を持つ。

「ごめんね。待った？」
「凪優がメール長くて。結構待ったでしょ？」
私が謝り、花梨は花梨でフォローという名の貶めをやっていた。
「いえ。大丈夫ですよ。私も今来たところですし」
「そう？　ならいいのだけれど」
「はいっ！　それに……」
「『それに』……??」
優梨愛の発言の続きを待つ私と花梨。
「ザコ共を黙らせるのに思いっきりヤれるんでしょ？　楽しみはとっとかないとね♪」
「……」
優梨愛の発言に唖然とする私と花梨だった。
そういえば、普段はおとなしい優梨愛だけど、戦闘狂なんだよなぁ……。
あの結衣でさえも抑止役に回らざるを得ない位に。
解ってる私や花梨でさえもここまで唖然となるのだから初対面の人だったら開いた口が開きっぱだろうね。

私達が合流場所からバイクを走らせること、７分。
この地元で結構有名な建設会社、『旭翔建設』に到着。
ビル内に入り、受付を済ませて最上階の会議室に行くと会社の社長・旭野將文（あきのまさふみ）（２６歳・独身）が上座に着席していた。
私、花梨、優梨愛はその対の席に着席する。

「今日も来てくれてありがとうございます」
「いえいえ。依頼ですし気にしないでください」
旭野さんの言葉に返答したのは優梨愛。
「依頼とはいえ、此方が助かっているのも事実ですよ」
「そう言ってくれると私も嬉しいですね。で、この資料にあるのが……？」
花梨が机上の資料を一通り閲覧し、対象について尋ねた。
「はい。此処が今日の対象です」
「成程。確かにこれはお灸を据える必要がありそうですね」
制裁対象を確認した私は黒い笑顔を浮かべた。
なお、花梨と優梨愛も同様であり優梨愛に至ってはヤる気だった。
まぁ、『武偵として』臨むのだし殺しはしないだろう。多分？
頼むから寸止めでな……？
「引き受けてくれますよね？」
私達に依頼を引き受けるか否か質問する旭野さんは
『断ったらどうなるか解ってんだろうなァ……??』（ニッコリ）
と脅迫してやがんだよね。
殺気慣れしていない武偵だと卒倒するだろうが
「ええ。少しお話してきますね☆」
「ザコ共にはキッチリしてきますから♪」
「断るなんてしないけどね。　安心しなよ」
引き受けるし、この程度の殺気なんて日常茶飯事だからスルーする私達である。

依頼者である社長と事前の打ち合わせを終わらせ、会議室を後にする私達。

旭野さんはこの辺周辺のヤクザを締める元締めである。
更に裏の世界に踏み込んでいるのは今はおいておくが。
彼には大半の団体は素直に従うが、その中には偶に彼の手に負えないやんちゃ団体が存在する。

その団体の粛清の依頼が私達に来るのだ。しかも名指しで。
教務科の方もこの依頼を達成した際の報酬が破格と言う位に良いので
『断ったら解ってんだろうなァ!?　ブチ殺すぞ」
状態でその状況に
「第９条あるだろ」
と野暮なツッコミはしないのがお約束という物である。
旭翔建設ビルから徒歩数分。
目的地の
『槇島組総合事務所』
に到着した私達は裏口から潜入とかはせずにもう真正面からの突破に決まってるじゃないですか。
「「毎度でーす」」
適当な挨拶した私達を迎えたのは
「ザッケンナコラーッ！」
「スッゾコラー！」
「チェラッコラー！」
「ルルァックァラー！」
「ワドルナッケングラー！」
「ワメッコラー！」
「ドカマテッパダラー！」

ヤクザスラングをひたすら喚く構成員（クソザコ）の皆様でした。
「えっと、少し　Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ　しましょうか？」（ニッコリ）
と私が、
「という訳で精々足掻けよ？　そして愉しませろよ？　このアタシを」
と優梨愛が、
「ま、死なない程度には手加減してあげるから感謝しなさいよね」
と花梨が、とびっきりの笑顔で言い放つ。

もう、構成員の皆様には死なない程度に無事は保証しない。

?????

１時間半後私はＯＨＡＮＡＳＨＩを終わらせて旭野さんに報告後、優梨愛と別れて次の目的地に向かっていた。

「今回の達成報酬も凄かったね……」

花梨が思い出したかのように発言する。

「確かに。『女子寮新棟の建設（工事費等は旭野さんの会社持ち）とトヨタＦＴ８６（新車）の進呈』だっけ」

私がその依頼報酬の内容を思い出す。

「相変わらずの破格っぷりだね」

花梨が苦笑気味に言った。

「うん。言うな」

これ以上突っ込むなと言わんばかりに私は返した。

「……で、次どこだっけ？」

「蘭豹とゆとり先生のところ」

「あ、そう……」

そう言って花梨は押し黙ってしまった。

以前、実体化してたら知らぬ間に蘭豹に目をつけられていたからな。

出会う度に戦闘を申し込まれてるから、おそらくは苦手意識があるんだろう。

蘭豹のしつこさ的な面で……。

蘭豹とゆとり先生が暮らすシェアハウスに到着した私は呼び鈴を鳴らす。

因みに花梨はお留守番である。

「はいはーい。どちらさまですかー？」

「私です。水無瀬凪優です」
「あ、水無瀬さん。いらっしゃい」
私を出迎えたのは担任教諭の高天原ゆとり先生だった。
ほんわかして、武偵校の教師には不向きだと思う事無かれ。
『血濡れゆとり（ブラッディー）』の異名を持つ元・凄腕傭兵で過去に私もガチで闘った事があるのだが、あれ程の猛者は居なかったと断言できる。
何せ、今も尚ＳＤＡランク全世界で１位に現在進行形で君臨している世界最強だからね。
「おう、来たか。さっさと作れや」
私の存在に気付いた蘭豹が『肴を早よ作れ』と催促する。
「了解です。キッチン借りますね？　あ、あとゆとり先生これ……」
「あ、さっきの依頼の仮報告書ね？」
「はい」
「わかりました。これは預かっておきますね」
「おねがいします」
ゆとり先生に先程の依頼が随分早く終了し、時間が余ったのでその時に作った仮報告書を渡した後、私は蘭豹先生の酒のつまみを作り、帰宅した。
おつまみは蘭豹とゆとり先生が取り合いになり、喧嘩に発展し、更に全部食われた怒りで乱入した綴で大乱闘が勃発する位に大絶賛だったそうな。

続くんだよ。

第００８弾　平穏なき夜　Ｓｉｄｅ＿Ａｒｉａ＆Ｋｉｎｊｉ…＆Ａｆｔｅｒ

（第００６弾でキレた凪優に部屋へ投げ込まれた直後のおはなし）

Ｓｉｄｅ＿Ａｒｉａ＿Ｈ＿Ｋａｎｚａｋｉ

……何故にあんな事してしまったんだろう。

朝の時点で凪優を怒らせちゃいけないって解っていた筈なのに。

こうなったのも全てバカキンジが悪い。あたしは悪くない。

あー、考えていたらなんかイライラしてきたから今すぐにでも風穴を開けてやりたい気分になってきた。

やりすぎると凪優が確実に怒るし、あたしのトラウマがまた再燃しそうだからおとなしくしておくのが最善策ってものよね。寝ていればイライラも忘れられるだろうし。

そう思ったあたしはソファーにあったクッションに顔を埋めたと同時に部屋の扉が開いた。

一体、誰だろう……バカキンジだったら風穴決定。

凪優だったら……おとなしくしていよう。

扉の向こうにいたのはバカキンジじゃなくて凪優だった。

げぇ!?　凪優ぅ……!?

凪優は今、怒っていないみたいだけどヘタに機嫌を損ねて彼女の逆鱗に触れるのはマズイ。

あたしのカンが全力を持ってその警鐘を告げている。

兎に角、会話の言葉選びは慎重にしないと……。

「アリア、頭は少し冷えた？」

「……うん」

下手に言葉を紡いで余計な事態を引き起こすのは死んでもイヤなので、あたしは簡潔に返事をすることにした。

「……そっか。今から私は依頼があるから行ってくるね。私が帰ってくるその間までにお風呂でも入っちゃいな」

「……わかった」

凪優はどうやら依頼先に赴く前にあたしの様子を見に来たらしく、あたしの答えを聞いた凪優は
「大丈夫だ」
と判断して、簡潔にあたしへ
「自分が依頼に行く間に入浴を済ませろ」
と指示を出したで、あたしは素直に従う事にした。
反論や拒否しようものなら、こっちの身が保証出来なくなるのは目に見えている。
「じゃあ行ってくるね」
「……いってらっしゃい」
あたしが凪優に見送りの挨拶をした直後、部屋の扉は閉じられた。
『あぁ……よかったぁ』
あたしの胸中はこの感情のみであり、ソファー横のマットレスに仰向けの大の字の状態で寝転んだ。
たまにこういう事をしたって問題は無いだろう――というか、文句を言われる筋合いは皆無だとは思う。

凪優が依頼で不在故にあたし一人だけになったこの空間でふと考える。
そういえば、武偵高における依頼受注用の掲示板は『一般』と『名指し』の二つがあったっけ。
武偵高では外部からの依頼が多岐に渡って舞い込んで来るので、先ず『一般』と『名指し』に区別される。
『一般』とは、東京武偵高校に対する依頼でそのジャンル毎に合った学科に振り分けられ、その学科の生徒であれば誰でも請け負う事のできる依頼のこと。
対しての『名指し』とは読んで字のごとくで、依頼を請け負う生徒を依頼主側が指定し、『一般』よりも優先度は高くなっており、その理由もキチンと存在する。
『武偵憲章第2条　依頼人との契約は絶対に守れ』

と、ある様に外部からの依頼は武偵たる者、絶対に守らねばならないのが基本。
『名指しで』依頼を行うというのは、依頼を出した時点で依頼人との契約が成立しているモノと同義である。
幾ら『一般依頼』を優先にして依頼契約を達成したとしても、優先度を低くした『名指し依頼』は大抵不履行扱いとなる為、武偵憲章２条に反する結果となってしまうからだ。
凪優が今回請け負った依頼は『名指し』だと思うけれど、考えるのも野暮ってものよね。
依頼の過度な内容の詮索・干渉は非推奨だもの。
機会があったら凪優が依頼に行く時はあたしも同行しよう。
この目で凪優の実力も見ることが出来るわけだし。
それはそれで良いとして。
取り敢えず今は、誰もいないうちにお風呂に入ってこよう。
と、思ったあたしは着替えを手に部屋を出て洗面所に向かうことにした。
Ｓｉｄｅ＿Ｏｕｔ……

Ｓｉｄｅ＿Ｋｉｎｊｉ＿Ｔｏｈｙａｍａ
何が何だか知らんうちに追い出されてしまった。
反論しようにもあんな凪優の前で出来る訳がないに加え、ご丁寧に財布とケータイも渡されてるから拒否権なんて微塵も無い。
俺は近所の繁華街をぶらついた後に夜のコンビニで口を尖らせながらマンガ雑誌を立ち読みをして、立ち読みだけでは悪いので１冊買ってから自室に戻った。
泥棒のような手つきで、玄関の扉をソー……ッと開ける。
ここは他人の家ではなく俺の自宅であるハズ――なのに何故こんな事をせねばならないんだ……？
同居人と居候よりも家主が一番肩身が狭いって可笑しい話だろ……。

お……？　アリアの気配がしない。
念には念を入れてリビング・キッチンも見回すが、姿はない。
凪優が追い返してくれたのか……？
まぁいい。とにかく良かった。俺の思いが通じたようだ。
……そういえば、凪優もいない。
あぁ、思い出した。アイツは今日、名指し依頼があるとか言ってたな。
まだ帰宅していないようだからそのうち、帰ってくるだろう。
「（´д`）「ヤレヤレ　と、安堵の息をつきつつ、一応外から帰ってきたので手を洗う為に洗面所に向かった。
ちゃぽん。
洗面所に向かった俺を出迎えたのは、風呂場から聞こえた水音だった。
見れば曇りガラスのドアの向こうでバスルームの電気が灯いている。
うっすらと見えるちびっこい人影は浴槽からにょきっと足を出して鼻歌を歌っていらっしゃる。
ああ、なんだ。アリアは帰ったのではなく、風呂にいたのか。
……。
……ん？
今、俺は何と言った……??
風呂……。
……。
――はい!?
――風呂ぉ!?
俺は音が聞こえるくらいに勢いよく洗面所で後ずさった。
そうか。凪優はこの事を想定して俺を外に出したのか。
なんていうか……気配り上手というか、策士というか……。
おそるおそる見下ろせば、プラスチック製の洗濯カゴにはアリアの制服がぶち込まれており、裏返しになったスカートの内側には秘匿用のホルスターがあって左右の拳銃が露出している。（一種のガンチラ

か？）
更にこれも裏返った白いブラウスには2本の短い日本刀が覗いていた。（一種の刀チラ？）
人影……もとい、アリアが湯船から出る音がして、俺が心臓が裏返りそうになる。
……ありえん。
……ありえんだろ。この状況は。
んな、ラブコメみたくドキドキできるシチュでもない。これは……ヘタな事をすれば死のデス・ゲームだ。
と、軽くではなく完全にパニクった俺の耳に追い打ちをかけてきたのは――
……ピン、ポーン……
慎ましい、ドアチャイムの音。
……。
こ、こんなドアチャイムの鳴らし方をするのは俺の知る限りじゃ一人しかいない。
（し、白雪!?）
まさしく、『前門の虎、後門の狼』な状態であまりにもあんまりすぎる展開に、
「う、うをっ……Σ（゜д゜lll）!?」
俺は飛び出した廊下で足がもつれ、壁に思いっきり体を強打してしまった。
「キ……キンちゃんどうしたの!?　大丈夫!?」
ドアの外から聞こえる白雪の声。
い、いかん。今の音を聞かれてしまった。これでもう居留守は使えない。
「あ、ああ。大丈夫」
平静を保っている感じを最大限に装って玄関のドアを開けると……緋袴に白子袖――所謂、巫女装束の白雪が、何やら包みを持って立っていた。
「な、なんだよお前。そんな格好で」

バスルームの方をチラ見してアリアの様子を伺いつつも、ぶっきらぼうに応対する。
「あっ……これ、あのね。私、授業で遅くなっちゃって……凪優ちゃんに頼まれた食事をすぐに作って届けたかったから、着替えないで来ちゃったんだけど……い、イヤだったら着替えてくるよっ」
「いや、別にいいからっ」
このままにしておくと本気で着替えてきかねないムードの白雪を制止しておく。
『授業』、というのは『S研の授業』のことだろう。
それと、この状況はこの家の同居人が作り出したのかよ……。
恨むぞ……凪優……。
そう思っていたら、白雪が俺に質問をしてきた。
「ねぇキンちゃん。今朝出てた周知メールの自転車爆破事件って……あれ、もしかしてキンちゃんのこと……？」
「あ、ああ。俺だよ」
と、早口に言うと白雪は文字通り……リアルに１０ｃｍくらい飛び上がった。
「だ、大丈夫なの!?　ケガとか無かった!?　て、手当させてっ！」
「俺は無事だからっ！　触んなっ」
俺に手当てをしようとする白雪を必死に拒む俺。
白雪が押し寄せている状態なので、何処とは言わないが当たっている。
俺の血流的にもそれは宜しくない。ヒスったりなどすれば間違い無く拳銃自殺モノだ。
「は、はい……でも良かったぁ、無事で。それにしても許せない、キンちゃんを狙うなんて！　私絶対、犯人を八つ裂きにしてコンクリ……じゃない、逮捕するよ！」
「帰ってきて早々、何故に『八つ裂きにしてコンクリートに埋める』っぽい台詞を聞かなきゃいけないのかな？　勘弁してよ……白雪」
なんか白雪の台詞の一部に妙な単語があったような気がしたが空耳だろうと思ったが、丁度帰宅した同居人のセリフで聞こえたのは事

実だとわかった。
ようやく、帰宅してくれたか……。この状況を打破する救世主が。
Ｓｉｄｅ＿Ｏｕｔ……
Ｓｉｄｅ＿Ｎａｙｕ＿Ｍｉｎａｓｅ
「は、はい……でも良かったぁ、無事で。それにしても許せない、キンちゃんを狙うなんて！　私絶対、犯人を八つ裂きにしてコンクリ……じゃない、逮捕するよ！」
おぉう、玄関先からとんでもない語句が聞こえてくる……。
「帰ってきて早々、何故に『八つ裂きにしてコンクリートに埋める』っぽい台詞を聞かなきゃいけないのかな？　勘弁してよ……白雪」
私は呆れつつも、物騒な発言の主、星伽白雪に突っ込んだ。
「あ、おかえり。凪優ちゃん。今日もご苦労様です」
「うん。白雪。……あ、これがそうなの？」
「うん。はい、これ。頼まれていた食事だよ。ついでに凪優ちゃん用の夜食も入ってるから」
「ありがとうね。本当に助かるよ……」
こういう気配りができる白雪様々。婿になる人は幸せだね。こりゃ。
こんな優良物件そうそういないと私は思う。（愛は重いけど）
「よかった。喜んでもらえて。凪優ちゃんも頑張ってね。無理はしないでね」
「うん。そこの所は最大限配慮するわ」
飽くまで「最大限の配慮」。
「やらない」とは言わない……つか言えない。
だって、何時何時に依頼が舞い込むか不明だからだ。表も裏も。
「じゃあ、おやすみ。凪優ちゃん、キンちゃん」
「うん。おやすみ白雪」
「おやすみ、白雪」
玄関の扉が閉まり、白雪は帰っていった。

これでキンジの一難は去ったであろう。
「じゃ、キンジ、私はこれ片付けてくるから」
そう言って私は白雪からの差し入れの食事を手にキッチンに向かう事にする。
「ああ。わかった。俺は『後門の狼』の処理をしてくる」
そう言って、キンジはバスルームへ駆けていった。
「止めないの……？」
精神体から実体になった花梨が尋ねる。
「止めない。もうどうなろうとも自業自得だし」
私は淡々と介入しない事を告げた。
「まぁ、そう……だね。私達が出なくてもいいよね」
それを聞いて何かを察した花梨は私に賛同の意見を述べた。
「ま、そういうこと」
私は花梨の意見を肯定する。
「凪優……私疲れたしもう寝る。おやすみ……」
花梨は眠気まなこで私に言う。
「実体で寝るのは良いけど、身体の浄化術式と着替え忘れないでよ？」
私は花梨に注意を促す。
「うん……わかったぁ……」
花梨は覚束無い足取りで自身の寝室に向かった。
花梨を見送った後、白雪から貰った包みの中身を保存容器に移し替えて冷蔵庫に入れる作業中にアリアとキンジの悲鳴やら何やらが響いているが、私はそれを知らぬ存ぜぬでスルー。
そんな痴話喧嘩如きにに構っている暇はないのだ。此方とて色々とやる事はあるのだからな。
『これが終わったらまずは兄さんに連絡だな』
そう考え、今の作業を終わらすことに集中した。
「あ、もしもし、兄さん？　凪優だけど？　……うん、ちょっとお願いしてもいいかな……？　……うん。兄さんに調べて欲しい事があるの……」

私は作業が終わり、自室で兄さん……公安０課第３班所属、水無瀬（みなせ）雄一郎（ゆういちろう）に調査依頼の電話を掛けたのだった。

なお、私が兄さんに電話を掛けたのが４日ぶりで前半は兄さんを宥めるのに時間を要したのは心底どうでもいい余談である。

Ｓｉｄｅ＿Ｏｕｔ……

続くんだよ

第００９弾　朝が来ようが変わらぬものもある

「バカキンジ！　ほら起きる！」
「はにふんだこの！」
「朝ごはん！　出しなさいよ！」
「し……る……か！」
「お腹が空くじゃない！」
「空かせこのバカ！」
「バカ――――ですって!?　キンジの分際で！」
　寮の自室の隣の部屋からアリアとキンジの仲良さそうな喧騒の声が響き、私は目を覚まし窓の方を見ると、窓から陽射しが差し込んでいた。
　もぉ……あ、さ……なの？
　今の私の状態は『二度寝バッチコイ』であり、目覚ましにシャワー浴びようもんなら『脱衣場で全裸寝落ち』をカマしそうな勢いまである。
　現在時間は６：３０で、確か作業が終わって寝たのが３：３０位だったから……うわ、３時間くらいしか寝てないのか。
　つか、本気で隣のバカップルが五月蝿ぇ。さっきの前言撤回だわ。今バッチリ目覚めた。言うなれば私の低血圧設定行方不明なくらいにね。
　ってかよー、朝っぱらからそんなに叫ぶなし。こっちは深夜まで作業があったからずっと頭にガンガン響いて仕方がない。
　あんのバカップル共はもうちょっと、此方に気を使って欲しいものだ。
　……そうだ。ちょいと文句でも言ってこよう。うん。
　文句を言ったって赦されるだろーし。
　そう思った速攻で私はキンジ（とアリア）の部屋へ向かった。
「（ ⊠ ω⊠ ）スヤァ…　」
　花梨はというと寝不足な私を差し置いて絶賛爆睡中。幸せそうな寝顔が尚更にムカつくわ。

なんか不公平な感じの感情を抱いた私は間違いじゃないよねぇ!?
憂さ晴らししても良いよねぇ？　ねぇ？
ま、そんなことはさておき……キンジの部屋の前に到着した。
その直後にキンジの部屋からは
「お腹が減った！　へったへったへったへったへったあああ!!!」
アリアの大絶叫が聞こえる。
お前はガキの類か？　あぁ……ゴメン。（身長含め）ガキだったわ（爆）
と納得はできるかもしれないけどさ、睡眠時間を邪魔された私の堪忍袋の緒は切れる寸前だぞっ☆

「朝っぱらから五月蝿ぇっての！　近所迷惑でしょうが！」
私はドアを開けてキンジに叫びつつ襲いかかるアリアを注意する。
「何よ？　今このバカキンジに文句を言ってるんだから……って、げぇ!?　凪優ぅ!?」
自身の主張を邪魔されたアリアは敵意丸出しで噛み付くも私の姿を見るなり、何か恐怖対象を見る態度を見せていた。
「だからなんなのその反応。……まぁいいや。アリア、朝ご飯なら今から用意するから食べるなら早くダイニングに来なさい」
「あ、うん。わかったわ……」
アリアの態度に疑問を持ちつつも言う事をサッサと言うことにする。
「それと、キンジも食べるなら早く来てよね。アンタは昨日、自転車破壊されちゃったんだし、バス通でしょ？　５８分のバスに間に合わなくなるよ？」
「あ、ああ……。わかった」
キンジにも言う事を言って私はキンジの部屋を後にしてキッチンに向かう。
良かった。昨日、白雪に料理作って貰って正解だわ。
あれを温めて、何か汁物作れば朝食は大丈夫だろうし、あとは昼用のお弁当ね。あれも小分けしておいた分を詰めれば大丈夫よね。

そんな事考えつつも冷蔵庫から汁物……お吸い物の材料を取り出し調理に取り掛かった。今日は旬だから、浅蜊と菜の花にしよっかな。

「「御馳走様でした」」
「はい。お粗末さまでした」
食事を終え、登校準備に入るキンジ達を横目に私は洗い物をしている。既に登校準備は終えているし慌てることはない。
「アリア、登校時間をずらすぞ。お前、先に出ろ」
「なんで」
「なんでも何も、この部屋から俺とお前が並んで出てってみろ。見つかったら面倒なことになる。ここは一応、男子寮ってことになってんだからな」
あー、そういえばそうばそうだっけ。ま、私が男子寮から出入りする時点で曖昧になってると思うけど……。
「上手いこと言って逃げるつもりね！」
「いやいや、アリア、同じクラスで席が隣同士……。これじゃ逃げようがないじゃない。問題無くない？」
「あ……。それもそうね」
私はやんわりとアリアの主張を否定し、納得したアリアは引き下がった。
「キンジ、もうそんなこと言ってる場合じゃないと思うけど。……時間を見なさいな」
「……時間？　げっ！　やべぇ！　行ってくる！」
キンジは手早くダイニングの椅子に置いてある鞄を手に取って寮を後にした。
「はいはい。いってらっしゃい。……さて私達も行くとしますか……」
「何で行くのよ？　まさか、徒歩とか言うんじゃないでしょうね？」
キンジを見送った後、洗い物が終わったので私も登校を始める。

無論、アリアと――朝食を終えて未だ寝ている花梨も一緒に……だ。
花梨はお米様抱っこで連行すれば大丈夫じゃね？（適当）
「んなわけないじゃない。車で行くわよ。花梨が二度寝してて目覚めそうに無いし」
「あぁ……成程ね。車って……凪優、車持ってたっけ？」
私の答えに未だに『（ ⊠ω⊠ ）スヤァ…』な花梨を見て納得のアリアは最もな質問をする。
「ん？　最近つーか、昨夜依頼報酬でもらった」
「どんだけ気前がいいのよ、その依頼主。……で、もう届いてるの？届くの早すぎない？」
私の解答に理解が追いついていないアリア。当然の反応っちゃ反応である。
「まぁ、『超速達で送る』って言ってたしそんなものよ」
「そ、そうなんだ……」
私はアキ……旭野將文の名は伏せといてサラッと説明した結果、アリアは軽く引いていた。
「さて、行きましょ？」
「ええ」
寮を出て私とアリアはガレージに向かう。
武偵高の寮には車輌科（ロジ）の生徒も居る為、敷地内に専用のガレージが設けられており、車輌科（ロジ）以外の生徒も学校に申請書を出せば使用することができる。
私とアリアはそのガレージに停めてある昨夜の依頼報酬――『トヨタＦＴ８６　ＧＴ　〝Ｌｉｍｉｔｅｄ〟』に乗り込む。
花梨はと言うとトランクにテキトーに放り込んだ。結構優しくとは程遠い扱いだったがそれでも起きる事はなかった。
起きてたら定員オーバーだし、不当な扱いに激おこになるだろうし助かった感は正直ある。
私達を乗せた『トヨタＦＴ８６ＧＴ　〝Ｌｉｍｉｔｅｄ〟』は東京武偵高校・本校舎前に向けて走り出した。

……え？
『運転はどっちが？』

勿論、私だよ。まぁどっちも運転免許持ってるけどさぁ……自分の車なのに自分で運転しなきゃどうするのって話よ。
１０分くらい走らせて目的地に到着する。
「はい。到着。アリアは先に行ってて。私は車輌科のガレージに車停めてくるから」
「わかったわ」
校門の前でアリアを降ろし、武偵校に併設されている車輌科のガレージに車を向かわせる。
因みに車輌科のガレージの使用申請は昨晩終わらせて、もう受諾済みだ。
車輌科のガレージの一画に車を停めて私も本校舎の教室に向かう。

あ、花梨をどうにかして起こして教室に連れて行かないとなぁ……
なーんて、思いつつトランクを開けると
「（？。???。）」
……なんかの見間違いだろう。
現実逃避の為にトランクを閉める私。
すんげーキレている花梨なんて私は見ていない。
恐る恐るもう一度トランクを開けると
「（ ?? ??）ｙ┃・～」
愛銃の『コルト　ダブルイーグル』と『ＤＷ　ダン・ウェッソンリボルバーＭ１５―２』を此方に突きつけている花梨の姿があった。
私はこの後の疲労困憊なんて知った事かと言わんばかりに能力で身体を強化しまくって逃亡を図る。
般若とか阿修羅が生易しい状態の花梨に捕まろうもんならば、人外ランキング２位の私でも致命傷負わないだけ御の字だろうな。
こうして私と花梨の楽しい楽しい地獄の追いかけっこが此処に開幕しせり。

尚、途中で絢香(緋緋神)、瑠樺(瑠瑠神)、凛花(璃璃神)と遭遇したが誰も助けてはくれず皆は私に向かって合掌しているだけだった。

薄情な面々に絶望しつつ花梨(地獄)から全力逃亡である。

オチとしてはこの地獄の追いかけっこは2人揃って世界最強(ゆとり先生)に凹され、有難い『O☆HA☆NA☆SHI』を受ける形で終幕するのであったとさ。

そうして学校にはナチュラルに遅刻したのは当然の結果といえばそうなので言うまでもない。

続くんだよ。

第０１０弾　ウラ取りと条件

武偵校では1時間目から4時間目までは普通の高校と同じ一般科目の授業を行い、5時間目以降は各々の専門科目に分かれての実習となる。

私みたいに掛け持ちしている生徒は受講するカリキュラムを自分自身で組む。無論、教務科から指示はよほどやらかさない限りはない。

このような事を説明するという事実から察せるが実際に全てのカリキュラムを教務科から指示された問題児が居た。

その人物は言わずもがな私の兄さんである。

兄さんは私と少しでも長く居たいが為に全部寸分狂わずにカリキュラムを被せてきやがるのだ。

その結果は想像通りではあるが、実習にすらならない。無論、悪い意味である。

私は羞恥心で兄さんに『くたばれ』と数え切れないくらい思ったことが無い訳がなく、そんな私の心情と兄さんの奇行を鑑みた結果だった。

教務科に全てのカリキュラムの指示をされた兄さんはというと当然不満しか無かったので、抗議をしたが、当然却下。

それでもなお、喰い下がったのだが最終的にゆとり先生の　ＯＨＡＮＡＳＨＩ　を受ける事で解決となった。

当時、私はそんな兄さんを見て『ざまぁｗｗｗｗ』と嘲笑うほどに大歓喜である。

そんな事はおいておこう。

昼食を終えた私は、名指しのクエスト依頼がないかを確認する為にクエスト依頼の掲示板に来ていた。

そこで、その場所では滅多に会わない生徒と遭遇する。

「あら、キンジ珍しいわね。滅多にクエストを受けようとしない事で有名な貴方がこんなところにいるなんて」

「凪優か……。たまにはクエ受けてみようかな……と思ってさ」
「ふーん。アリア対策に？」
「……」
私の発言に何も返してこないキンジはどうやら図星のようで、無言のまま此方を見ている。
私的に言わせれば、すっごく顔に出てるからバレバレなんだけど。
でもキンジの努力は無駄だと思うけどね。
確実にアリアが探偵科（インケスタ）の専門棟近くで待ち伏せしてるもの。
第三者である私が何故知ってるかというと、昼休みにアリアと昼食摂っている時に相談受けたのでこうなる様に仕向けたからだ。
こんな事をキンジに言えば、アリアと二人揃って煩くなるだろうし言わないけどね。
「キンジが滅多に受けないクエストを受けようとした動機はどーでもいいけどさ。どんな依頼受けたの？」
「Eランク武偵にお似合いの簡単な依頼だよ」
私が雑談がてらキンジにクエ内容を問うとキンジは投げやりに答えた。
確か……最近追加された『Ｉｑ―Ｅ』の分類コードのクエストは……
「分類コード『Ｉｑ―Ｅ―１５７』の『青海の猫探し』のクエか……」
「何故に分類コードまで正確に把握してるんだよ!?」
私がキンジの受注した依頼を当てると、キンジが驚愕していた。
そんなに驚く事なの……??
「だって、この掲示板の管理は教務科（マスターズ）からの依頼で私がやってるし」
外部依頼のクエスト掲示板の更新作業は正式な教務科からの依頼である。（コードはＩｎｆ―Ａ―０００）
「理由になってないじゃねぇか」
「管理してるってことはそのクエが、どの科に所属する武偵で、どのランクの武偵に合ったレベルの難易度なのか把握してるでしょ？」
私はキンジの問いに対し、そう答えた。
「まさか、ここに出ている依頼の難易度とか全部覚えているのか……

？」
キンジがおそるおそるそんなことを聞いてきた。
「流石に全部とはいかないけれど大体は覚えてるわ。キンジ、そのクエやるんならこの資料を参考にしたら？」
私はそれをやんわりと否定し、１部のファイルをキンジに渡した。
正直なところ、記憶力は良い方だから９割５分は覚えていたりはする。言わないけど。

「……？　なんの資料だ？」
キンジはその資料をサラッと読んでから尋ねた。
ここで渡されたから察するか、推理しなさいよ。仮にも探偵科なんだし。
「『なんの』って……。キンジが探す猫の行動パターンの資料よ」
「そんな資料いつ作ったんだよ」
「さっき」
私は間違った事は言っていない。昼休みに暇を持て余したので片手間に作ったものだ。
アリアに相談を受けた時点でなんかこんな予想できてたからな。
「……ありがたく受け取っておく」
キンジは私の発言に呆気に取られていたが、直ぐに復活し、探偵科（インケスタ）の専門棟の出口の方へ駆けていった。
私はテキトーで労う感情でキンジを見送り、クエスト確認に戻る。
さて、名指しクエも特段無いようだし、今日は強襲科（アサルト）で戦闘訓練するかな……。

思い立って行動に出た私は強襲科（アサルト）での戦闘訓練に勤しんだのであった。
その頃、キンジとアリアは喧嘩しつつも上手くやっていたようである。
本当に仲が良いコンビで、事の顛末を夕食の場で聞いてそれを言ったら、見事にハモって否定された。

全くもって仲が良いコンビだな。この二人（キンジとアリア）。

その翌日も特段クエが無かったので情報科（インフォルマ）に顔を出したあと、強襲科（アサルト）での戦闘訓練に勤しむ。

強襲科（アサルト）での戦闘訓練を終え、放課後になった瞬間にスマホに着信が入る。相手は……旭野さんか。

「はい、もしもし」

『久しぶりだね、凪優ちゃん。今、時間はあるかい？』

「え……。まぁ、特段クエとか無いんで、大丈夫かと思いますけど」

『そうか……。では３０分後にいつもの喫茶店に来てくれないか』

「（喫茶店……。って事はそっち側の話ね……）了解です」

『では、待っているよ』

通話は終了した。

「で、何だったの……？」

丁度私と合流した花梨が尋ねる。

「さぁ？　でもあっち側の話だろうね」

私がそう答える。

「ふーん。そっか。じゃあ私はテニス部の方に行くね。帰りは遅くなるから」

「りょーかい。で、晩御飯は？」

「んー……と今日は皆でファミレスに行く約束だし要らない」

「解った。じゃあね」

「うん。（´・ω・`）ノ～バイバイ」

花梨と別れた私は待ち合わせの喫茶店に車で向かった。

「よぉ。意外に早かったな。凪優」

喫茶店に到着した私を迎えたのは旭野さんだった。

しかし、いつもと口調とか違う。

何というか態度がでかい。

「アンタから貰った車のお陰よ、アキ」

私の方も敬語とか無しで対応する。

「何時もとは違って敬語はなしかよ」
「そりゃお互い様でしょうが」
「まぁそりゃそーだな。こっち側だと敬語はムズ痒くてたまらん」
「こっちの方が素のくせに」
「それ言うんじゃねーよ。それとも何か不満か？」
「いや。別に。寧ろ今の方で敬語使われる方がぶっちゃっけキモいわ」
いきなりの罵倒合戦である。
何事かと思うだろうがこれがデフォルトなのである。
「まーいいわ。そこに座れ」
「はいはい」
アキに言われ、私はアキの対面に座る。
「まず、これが雄の奴に頼まれた資料だ」
「兄さんに……？」

アキが兄さん……水無瀬雄一郎に頼まれたという資料に目を通す。
それはアリアの事についての資料だった。
「……成程ね」
数日前、私とキンジに「ＰＴを組め」と言った時にアリアが言った言葉。
「あたしには時間がないの」
という発言。
これに私は引っ掛かっていた。
アキ経由で私の手元にある兄さんからのアリアに関する資料を見てその言葉の意味を理解することができた。
「で、アキ。なんでコレにイ・ウー　の奴等が関わってる訳？」
何故か私が属する組織の名が出てきた。
教授が何かを条理予知（コグニス）で掴んだのかしら？　そんな事一つも聞いてないんだけど。
あの人に限ってサプライズは……ものすごくしそうだけども!!

「知る訳ねーだろ。俺にも老害共の考えている事はさっぱりだし、教授も何も言わねーし」
アキは私の問いに知らないと返す。
老害共に近いアキにも解んないのかぁ……。
「そっか。……で、この案件に関わっている奴等は判明してるの？」
「ああ。このリストに載っている奴等だな」
私はアキから資料を受け取り、目を通す。
「うえ……。ナニコレ。殆どじゃない」
資料を見た途端に私は顔を顰めて呻き声を上げてしまった。
そこには私が党首を務める研鑽派（ダイオ・ノマド）以外の奴等の殆どのメンバーがリストアップされており中には何人か私の党派である研鑽派（ダイオ・ノマド）からも引き抜きもされているからだ。
リストの参加者にあった『ブラド＝ツペシュ』――アイツは誰かに操られて署名したよな。それは確実に解る。
だって……あの『凪優（わたし）のおとん』ともイ・ウー内外で噂されるブラドだよ？
そんな彼が私と対立する様な勢力に賛同する訳がない。こればかりは断言できる。

「最も、対立する奴等が居なくなったからこの現状を生み出してるんだがな……」
「偶然……とも言い難いし、意図的に私達が居なくなるのを狙ってやがったのか……」
私はアキの言葉に嘆息せざるを得なかった。
実際研鑽派《ダイオ。ノマド》がイ・ウーの抑止役を担っていた中で幹部格である私達が相次いで休学状態となれば無理もない話ではある。
「そう言うな。リストに俺達の名前が無いだけマシだろ？」
「まぁね。お蔭様で行動しやすいから助かるけどさ」
確かにこのリストに私達の名前があったらアリアとは敵対する訳だし動きにくいったらありゃしないし、ややこしくもなるし、それに

アリアをフルボッコにする未来しか見えない。
無いなら無いで、武偵である表、イ・ウーメンバーである裏。この両方がフルに使えるわけだから気兼ねなく行動を起こせるから都合が良い。
「やっぱ、お前も動くのか」
私の思惑を察したアキの言葉に
「当然。どう考えてもアリアとキンジ2人だけじゃ無理がある」
私は肯定した。
事実、アリアとキンジ……。あのコンビといえどもこのメンバー相手だと荷が重い。
私が参戦すればそのスムーズさも変わるだろう。
何よりも……私自身、あの老害共が気に喰わんのだ。
会う度にネチネチ文句しか言いやがらねぇわ。
否定の割に碌でもない事しか考えねぇし。
私的にさっさと隠居して欲しいもんだ。
それと……未海姉との決着も付けねぇとな。
あのリストに未海姉……『綾乃未海(あやのみう)』の名前があった。
未海姉は私の師で……そして私が止めなきゃいけない相手。
最悪……殺してでも。
私にとっては最大級の因縁がある相手なのだから未海姉の存在がある以上、参戦しない選択肢はない。
「そうかい。俺も雄も出来る限りサポートはする」
「ありがと」
アキが兄さんと共にサポートする事を申し出たので私は礼を言う。
「礼は良い。俺とお前の仲だろ。あと、コレは要るだろ?」
そう言ってアキは私に手甲とワイヤーとカードホルダーを手渡す。
これは、私のイ・ウー活動時の装備ではないか。
「これって……」
「礼は機嬢(ジーニャン)の奴に言え。それ保管・メンテしていたのはアイツだからな」
「解った」

装具一式受け取り喫茶店を後にする為、席を立つ。
「死ぬんじゃねーぞ。氷天(ひてん)の魔女」
「そっちもね。鮮烈(ディーラスター)の雷撃」
私は喫茶店を後にして武偵校の寮に戻った。

それから、アリア達と夕食をとり、私は自室に戻る。
さっきアキに貰ったリストとイ・ウーのメンバー指導リストを照会し、イ・ウーメンバー専用の通信機を手に取り、ダイアル調整。
通信の相手は勿論、機嬢(ジーニャン)だが、最初に出るのが誰なのかは解らない。
あの姉妹は個々の通信機を同じ所に置いている。
彼女達曰く、
「そっちの方が解り易い」
……だそうで。
最初から機嬢(ジーニャン)が出れば問題はない。
だが、誰が最初に出るのは誰か不明。
故に……こういう会話で始まるのだ。
『☒(もしもし)？　誰ネ？』
「あ、その声は炮娘(バオニャン)？　私。凪優よ」
先ず、電話に出た相手を当てる。
ここからスタート。
結構難易度は高いが、それは慣れでなんとかなる。
今回は四姉妹の、次女、炮娘(バオニャン)の様だ。
『凪優？　真的(本当に)？　凄く久しぶりネ！』
私が相手で炮娘(バオニャン)は結構喜んでいる御様子。
語尾が弾んでいるのが何よりの証拠だ。
「そうね。ほぼ2年ぶりくらいかしらね……」
高校に進学後は全然連絡してなかったし。
確かそのくらいだろう。
『もう、連絡寄越さないで超心配したネ。――で、今日はどうしたネ』

かなりの話したい事があったのだろう。
結構長い時間私は炮娘と話し込んでいた。
そして、炮娘の話に寄れば、藍幇の幹部、諸葛静幻も私をかなり心配しているらしい。
……修学旅行Ⅱで香港を旅行地に出来たはずだ。
その時に会いに行ってアイツ等を安心させてやろう。
私はそう心の中で誓った。
「うん。機嬢にお礼と猛妹に聞きたいことがあってさ……」
暫く話した後、私は本題を切り出す。
そして、四姉妹の三女、猛妹と四女の機嬢へ取り次ぐ様に炮娘依頼する。
「猛妹と機嬢？　その二人ならもうすぐ帰ってくるネ。ちょっと待つよろし』
どうやら、二人は外出中らしい。……が、あと少しで帰ってくるようだ。
ちょっと待って欲しいと炮娘に頼まれる。
「わかった」
私はそれを了承する。
そしてその間、炮娘と偶然其処に居合わせた四姉妹の長女、狙姉と話していた。
当然、狙姉にも私は物凄い心配された。
そしてしばらくして、猛妹と機嬢が帰ってきたようだ。
通信の相手が私だと知るやいなや、すごく喜び、通信に出た。
『☒？　凪優？』
「あ、機嬢？　ありがとね。私の装備をメンテしてくれて」
私は自分の装備の礼を行った。
『？介意。凪優は私のお得意様だし当然ネ』
機嬢はそう言ってくれるけども。
「ホント、ありがと。これからも装備のメンテとか頼むだろうけどその時は宜しくね？」
有難いものは有難いのだ。

私は再三、機嬢(ジーニャン)に御礼を言った。
『可以(OK)！　いつでも私に任せるネ！　――じゃあ、猛妹(メイメイ)に代わるネ』
「ええ」
私がシレっと言った要望にも機嬢(ジーニャン)は快く了承してくれた。
その後、機嬢(ジーニャン)と世間話をして、次の通信相手、猛妹(メイメイ)に代わる。
『☒(もしもし)？　凪優、私に聞きたいことって何アルカ？』
「あ、うん。このリストにあるやつなんだけどね……」

「これで全部ウラは取れたわ。ありがと。お陰で助かったわ」
『不客气(どういたしまして)、凪優。祝你好(頑張ってね)？！』
「？(うん)！」
『那(じゃ)，再(またね)？！』
「好了(うん)，拜拜(バイバイ)！」
通信を終えた私は気分転換も兼ねてコーヒーを淹れようとキッチンに向かう。
そして、トイレのあたりでキンジとバッタリ会う。
「あ、おかえり。キンジ、意外に早かったのね」
「な、凪優？　一体何のことだ？」
大体の事は察するが……
キンジよ。カマかけに引っ掛かり過ぎ。
それに……
「……キンジ、バレバレ。動揺隠せてない」
「う〝……」
私が指摘すると図星を突かれた表情を見せるキンジ。
「まぁ、安心しなさいな。幸いと言うべきか、アリアにはバレてないし」
「そうか……」
私のフォローに安堵の表情を見せるキンジ。
「ま、もうそろそろ来ると思うけどね」

「え？」
虚を突かれた挙句、絶望も相まってか固まるキンジ。
私の得意技、「上げては落とす」とはこの事で反応を見てその後で少し誂うのが楽しいのだ。
昔、パトラにこれやったら思いの外良い反応で、仲間全員で大爆笑していた。
アレで未だに思い出し笑いができるのは此処だけの話である。
そんな感じで誂っていた直後、カードキーで鍵が開く音がした。
「お帰りアリア」
『お帰り』……じゃないわよ。鍵くらい開けときなさいよ」
「いや、泥棒とかに入られたら嫌じゃん」
「そのくらい返り討ちにして逮捕しなさいよ」
「出来るけど、簡単だけど、泥棒に入られた時点で私の信用が落ちる」
「じゃあ、あたしが来るの予測して開けときなさいよ」
「無茶言うなて。ま、どーせ偽造カードキー持ってると思ったし別にいいかなって」
「あのねぇ……あたしが持ってなかったらどうしてたのよ」
「んなもん、決まってるでしょ？　放置」
「あんたねぇ……」
「もう居候の身で文句言わないの」
「むぅ……」
アリアの論に正論ぶつけてバッキバキに論破する私。
私の正論にぐぅの音も出ないアリア。
因みにキンジは私とアリアの会話の間は
「あ、いたんだ……」
的な放置状態である。
その後、私はキッチンに、アリアはリビングに、キンジは洗面所へと移動した。
私はコーヒーを淹れつつもキンジとアリアの会話を聞いていた。
まぁ、何と言うか面白いわｗｗｗｗこの二人。マジでｗｗｗｗｗ
キンジがこの前、アリアにしたという強制猥褻（未遂）で犯罪者扱

いされたりだの、
アリアがキンジのＨＳＳの発動条件も知らないのにさ……
「なんでもしてあげるから」
発言とか……。
聞いてて飽きない。
とはいえ、この手の話題はキンジの琴線に……下手せずとも逆鱗には触れるだろう。
その証拠にキンジは無意識のうちにアリアを押しのけていた。
さぁ……どうする、キンジ？
「……1回だけだぞ」
「1回だけ……？」
ふぅん……。成程ね。
無条件降伏じゃなくて、
「戻ってやるよ――――強襲科（アサルト）に。但し、組んでやるのは1回だけだ。戻ってから最初に起きた事件を、1件だけ、お前と組んで解決してやる。それが条件だ」
キンジは条件をアリアに突きつけた。
「……」
アリアは何も言わなかった。
「だから転科じゃない。自由履修として、強襲科（アサルト）の授業を取るそれでもいいだろ」
キンジ……条件付き降伏ってワケね。
しかし自由履修とは考えたな。
自由履修……これは武偵校において、生徒が自分が所属する科以外の専門科目の授業を受ける事の出来る制度。
無論、単位には反映されないが、多様な技術を要求される武偵になる為には理に適っている制度といってもいいので、生徒の殆どは割と流動的にこの制度を利用しているのだ。
斯く言う私も自由履修で狙撃科（スナイプ）、車輌科（ロジ）の授業を取っている。
自由履修の云々はさておいて、
キンジ、さてはＨＳＳという切り札を伏せたままの状態……通

常状態のままでやってアリアを失望させる魂胆か。
全く、どこまで組みたくないんだよ。コイツは。
そこまで来ると流石の私でも溜息が出るぞ。
「……いいわ。じゃあ、この部屋から出てってあげる」
キンジの譲歩案にアリアは妥協した。
「あたしにも時間がないし。その1件で、あんたの実力を見極めることにする。勿論、凪優もね」
ま、解ってたことだし別に不満はないけど。
「……どんな小さな事件でも1件だぞ」
「OKよ。その代わり、どんな大きな事件でも1件よ」
「解った」
「但し、手抜きしたりしたら風穴あけるわよ」
「ああ。約束する。（通常モードの俺の）全力でやってやるよ」
「解ったわ。約束する」
ま、私の場合、全力は出さないけどね。
そう。第4段階は使わない。
第2段階位までの全力を……ね。
でも、アリアには少しだけ明日見せてもいいかな。
第3段階の私を……。

続くんだよ

第０１１弾　転校生と本気の戦い

キンジとアリアの条件付き契約が成立した翌日、今は昼休みで私とアリアは２―Ａの教室で昼食をとっていた。
今は平和なんだけどね、先程私の弁当狙いで理子の奴が乱入してきたので何事も無く開いてる窓に理子を投げて落としましたよ（笑）
ま、理子（アイツ）はこの位で死ぬ奴ではないから（たぶん）大丈夫でしょ。
「りこりん、１０点満点っ！」
とか言って綺麗に着地してたしさ。なんつーかさ……
『極められたバカは超厄介』

まさしくそれが当て嵌まりそうな感じである事実には流石の私も苦笑するしかあるまいて。

「……ってば、ねぇ凪優ってば……！」
アリアが先程から私に呼びかけていたようだ。
「……（。д。）ハッ！　あ、ごめん、アリア。……で何の話だっけ」
私は現実に引き戻され会話に戻る。
ここまで私を思考の渦に巻き込むなんて理子、恐ろしい子……！
「もう……。今日、来る編入生のことよ。勿論知ってるわよね？」
「そりゃね。一応調べたけど。結構な手練だよね」
その話題は今日、強襲科（アサルト）に転入する編入生についてだ。
当たり前だけど事前に軽くはだけど調べたが、書類の記録上だけでもかなりの実力を誇る手練だね。
何処かで面識があった気がするのはなぜなんだろうか……??

「で、どれくらいの実力だと思う……？」
「ま、今の時点じゃ何とも言えないかしらね」
「そう……なのね」
記録だけだと戦術面の詳細等といった実力は不明だし、把握には実

戦に落ち着く。
「ま、次の時間でそれも判明するだろうけど」
「次の時間……って専門科目？」
　私の言葉に何かを察したアリアが尋ねた。
　今は昼休みなので次……午後からはそれぞれの所属科での専門科目である。
「蘭豹が編入生と私で次に時間の戦闘訓練の時に戦えってさ」
「そうなんだ……。で、凪優は本気でやるの？」
「まぁ、そのつもり」
　アリアの質問に若干言葉を濁しつつも私は肯定した。
「ふぅん……。あの時の奴でも本気じゃなかったんだ……」
「そうね。あの時のは大体7割位だし。本気出さなかったのも理由あるし」
『あの時』というのはチャリジャック無双のことだろう。
「『理由』って何よ？」
「簡単に言うとね、本気でやったら死亡秒読み」
「は？　えっ……『死亡』!?　嘘やハッタリじゃないわよね!?」
　私の返答に滅茶苦茶驚愕するアリアである。その証拠に食べようとしていた伊達巻（季節外れ）が箸から零れおちていた。
「うん。マジ。ノーリスクで強大な力扱えるわけ無いでしょ」
「あ……そうね。じゃあこの後、本気でしても大丈夫なの!?」
「問題ないわ。長時間使うわけじゃないし。ま、これ使えばノーリスクだけど」
　そういって私は3枚のカードを取り出す。
「それって、タロットカード……？」
「ええ。これは能力を使う時の補助道具みたいなものね。能力をカードに流し込むことでカードに書かれた絵が示す効果が発揮できるのよ」
「へぇ……」
　アリアは私が出したタロットカードを喰いるように見ている。
　その間に時間が止まる訳もなく、刻一刻と経過していく。

「早く食べちゃいましょ。時間もアレだし」
「時間……。そうね」
私の言葉で互いに食事に戻る事にした。
こうして私達の昼休みは過ぎてゆく。

午後の日程が始まり強襲科（アサルト）の体育館入口では自由履修で戻ってきたキンジが皆に（良い意味で）囲まれていて、私の戦妹（いもうと）である間宮あかりもキンジに憧れの視線を送っている。
あかりは私とキンジが友人レベルで留まっているのを知っている故にキンジに敵愾心は無いようだ。
以前にも
「キンジ先輩に矢の投擲を教わったんですけど、凄く参考になったんですよ！　今度、射撃も教わる事になったんですよ！」
と、嬉しそうに話していたからね。
射撃は正直、私よりもキンジの方が教えるのは向いてるだろうし指導を私一人で行うよりかは遥かに質は高くなるし。正しくＷｉｎ―Ｗｉｎだよね？
などと、あかりに対して思いを巡らせていると蘭豹の召集命令がかかった。

「つーわけで編入生が一人増える。編入生挨拶しろ」
何の事前説明も無しでいきなり話を切り出す蘭豹。フツーなら戸惑うだろうが、ここは武偵校。
『自分でそんくらい調べろや』
つまり、そういうことなのである。武偵の大前提だからね。
「はい。姫神結衣（ひめがみゆい）といいます。宜しくお願いします」
蘭豹の指示で姫神さんは自己紹介をして、周囲から拍手が起こり、男子からの口笛も聴こえる。

口笛をした男子共は蘭豹にラリアットされてたけど（笑）

「じゃあ、誰かと戦って貰おか。水無瀬、お前が相手やれや。負けたら承知せぇへんで」

蘭豹は予告通り私を指名した。脅迫は余計な気がするが負けてやる気は微塵もない。

「解ってますよ……。姫神さんだっけ？　この決闘の希望条件とかあったりする？」

指名を受けた私達は闘技場に登壇する。

私はこの闘いに条件を付けるかどうかを尋ねた。

「私の事は『結衣』って呼んでいいよ。じゃあ……『ランバージャック』しようよ。私達は武器を使わない徒手格闘だけ。幇助者（カメラート）とリング役は何でもアリでさ」

姫神さ……結衣はまさかのランバージャック（集団リンチ）を希望て、まさか……ドMなのか!?

「違うよ!?私は至ってノーマルだから!!　勝手にヒトを特殊性癖認定するの止めて欲しいんだけど!?」

「ゼンショスルワー」

私は結衣の訴えを興味ないし棒読みでスルーする。

「パトラじゃあるまいしその反応止めて!!　……良し、絶対に凪優はボコす。翠、幇助者（カメラート）やって！」

結衣は私の返答に不服だったらしく同じく転校生の椎名翠（しいなみどり）に幇助者を要請していた。

『パトラ』……なんかあの覇王（笑）の名前が出た気がするが気のせいかな？まぁ、あのリアクション芸人のことはどうでもいいや。

あの椎名さんは中々に手強そうだし……此方の幇助者（カメラート）はどうするかな。

候補的には花梨、葵、優梨愛辺りなんだけど……リング役も最強にしとかないと多分体育館壊れるだろうなぁ。

そうだなぁ……

「花梨、私の幇助者（カメラート）頼める？」

「うん。任せてよ、凪優。頑張ろうね！」
悩んだ末に私は花梨に幇助者（カメラート）を依頼する事にした。
花梨は私に幇助者（カメラート）を要請された事によってやる気に満ちている。
それと、もう一つやる事がある。
「葵、優梨愛リング役頼める？」
やる事はリング役を最強（最凶・最恐）にする事である。
幇助者が『何でもアリ』となれば、ヘタすれば東京武偵校――否、学園島が地図から消滅するかもしれないし。
それだけはなんとしてでも回避せねば。
「良いけど……殺りすぎないでよ？」
いや、武偵だから殺さねーよ!?なんか物騒だよ、葵!?
イ・ウーだったら『間違えて殺しちゃった（ゝω・）テヘペロ』あるかもしんねーけど。
「私は良いですよ？　私の所に来たら容赦無く全力でぶっ飛ばしますので。それと……私が乱入しても良いんですよ？」
（・3・）アルエー？
人選間違えたかな、私。
戦闘狂だったわ、優梨愛（この娘）。見た目に反して戦闘狂やったわ。
蘭豹とタメ張れるんだよなぁ……しかも互角やし。
イ・ウー時代に戦闘訓練の後、数多の（二一。凵。）心傷（トラウマー発症）者増産してるし。
……絶対に乱入させないでおこう。それが一番安全やね。うん。
（フラグ）
リング役の二人が対になるように立ち、決闘者である私と結衣が互いに向き合い構え、幇助者の花梨と翠が位置に着く。
外部からの決闘開始の合図は無い。
決闘開始の合図は決闘者が決める――普通はね。
「燃える天空（ウーラニア・フロゴーシス）」
「千　年（アントス・パゲトゥ・キリオン・エトーン）　氷　華」
幇助者である翠が放った広範囲焚焼殲滅魔法と花梨が放った高位の冷気魔法がぶつかり合い、水蒸気でフィールドが満たされる。

視界が遮られるので次手に僅かなラグによる隙が生じる――
「訳ないよね……」
私の呟きと同時に翠が放った爆焔を狗の型にして腕に纏い攻撃を行う結衣。
「狗音爆砕拳!!」
「桜花……、崩拳!!」
爆焔による光を自身の能力に変換して拳に纏い、放つ事で相殺を図る私。
ぶつかりあった技は私の狙い通り相殺される。
ここから次の攻めに転じねば。
…って考える暇も与えてはくれない。
結衣は即座に瞬動術――違うか、震脚による発勁みたいな感じするし、『活歩』の方か……。
懐に入り込まれると攻め手は限られてくるよね……。
「ま、誰も無いなんて言ってないけどね。
『ナロック・ギンナリー・レン・ナム』」
私は結衣の首に密着し、ムエタイにおける首相撲の状態になってサイドチョークの状態から変則的な連続の踵蹴りによって頭部を蹴り上げる。
「だよねぇ……。そうじゃないと面白くない！」
不敵に尚且つ獰猛な笑みを浮かべた結衣は
「『ガーンラバー・ラームマスーン・クワン・カン《爆ぜる斧を撃ち振る雷神》』」
高く飛び上がって空中に浮いた状態で頭部に肘を振り下ろす。
結衣の肘による一撃は私の身体の紙一重手前を直撃するが、私は咄嗟に背後に身体を反らして回避。
だが、一息入れる暇も与えない位の間隔で結衣の拳打がマシンガンで飛んでくる。
流石にすべてを喰らうわけには行かない。
私は負けじと拳打で結衣の拳打を撃ち返して迎撃するが、ここで一

旦攻撃の手を止める。
「(……!?　凪優が攻撃の手を止めた!?　一体、何をする気なの!?)」
結衣は私が行った一手に困惑しているようだ。
「せぃあっ!!」
今度は蹴りを用いて繊細に攻撃の流れを変え、
「バー・クワン・サバッド・ナー(狂気の牙を打ち振る舞い)」
結衣に突撃するように振りかぶって肘落としをする。
「私、貴女を殺すつもりはないよ?　武偵だからね。でも、今はただ打ち負かすだけだし全力でやる事に対しては躊躇いとかは一切合切……無い!!」
結衣に力強く且つ、ハッキリと宣言する。
個人的な私怨はないと言ったら嘘になるけれど、そんなのを持ち出すのなんか違うと思う。故に純粋に勝ちたいという感情の現れだからだ。
「そっ……か。成程ねぇ。『遂に』……じゃないな。久々に来たか。この頂きを実感できる闘いが!!　すっっっごく、嬉しいよ!!」
結衣はものすっごい嬉しそうだ。この戦闘狂がっ!
……なんて言いつつも内心はこれ以上ないくらいにワクワクしている。
こりゃあ、ヒトの事をどうこう言えないね?
『この戦いがまだまだ続けばいいのに』
と幾ら思えど、時間は有限。戦いの終焉も刻一刻と近づいている。
次の一連の攻防が勝敗を決めるといっても過言では……ないだろうな。
私の今思っていることは結衣も思っているだろう。
だからこそ……私も、結衣も同じ構えをとる。
『ワイクルー・ラーム・ムエ　ボーリスッド・ルークマイ(絶対なる秘技)』
『ワイクルー』と呼ばれるかつて野外で戦っていた時に地面のコンディションによって戦法を変えたり更に円を描き踊る事で結界を張り、己の潜在意識を極限までに引き出す効果がある舞に加え、
『ボーリスッド・ルークマイ(絶対なる秘技)』を追加。

これにより、互いの戦いに決着が着くことを意味している。
私と結衣は互いに地面に足を大きく踏み込んだ次の瞬間。
残像がくっきり見えるくらいに高速の拳打と脚技のラッシュ応酬がぶつかり合う。
どちらかが気を抜けば殺られる――そう錯覚させられるくらいのハイレベルな古式ムエタイの戦い。
この戦いを見ている蘭豹も段々と表情が険しくなってきていた。
どうやら、蘭豹は気づいているのだろう。
この戦い、本気で止めどころを失えばどちらが死ぬということを。
私と結衣の拳が互いの相手の心臓めがけて貫こうとしたその瞬間。
「戦い、止めっ!! 時間切れや、餓鬼共ぉ!!」
蘭豹の怒号がフィールドに鳴り響き、私と結衣は互いの心臓手前に寸止め状態で静止する。
危なかった……。彼処で蘭豹が止めなかったら間違いなく殺してたわ。多分、結衣も同様だけども。
互いに構えを解いた後は蘭豹の怒号を浴びながらもフィールドを後にする。
その後、リング役の葵、優梨愛に幇助者だった花梨と翠に加え蘭豹で第２Ｒが開幕していた。
なお、その戦いは超能力入り乱れる何でもアリの戦いだった事を追記しておこう。
因みに周りは皆揃って情報量過多で唖然としていた。無理もない話ではある。

「お疲れ様っ!! 引き分けって何となく後味悪いけど良い戦いだったね、って……え〝っ？」
私がこんな声を上げたのは無理もない。
何故なら、私が手を差し出した途端に結が泣き出したからだ。
当然私は訳がわかんないので戸惑っていて、それは周りも同様で「取り敢えず、凪優（水無瀬）が悪いんじゃね？」
という空気が流れ出す始末である。

「え、えーと、どうしたの、結衣？」
心当たりが皆無な私は結衣に尋ねた。
「『どうしたの？』じゃないよ！　ミナ！　ずっと会いたかったんだからぁっ！　連絡も一切寄越さないしさ!!」
泣きながらそう訴えるは結衣。
「え、あっ……ゴメン。……待って」
「ふぇ……？」
「結衣、今私の事『ミナ』って呼ばなかった……？」
なーんか、引っかかるんだけど。
さっきから見覚えあんだよなぁ……んーと、誰だっけなぁ……。
「うん、呼んだよ？　だって、ミナはミナじゃん」
「……」
結衣の答えに固まる私。
私の事を『ミナ』って呼ぶのは知り合い……しかもイ・ウーメンバーで該当者は1名。
イ・ウー研鑽派（ダイオ・ノマド）・『紅蓮の魔女』姫神結衣しか居ない。
「もしかして……『ヒメ』なの……？」
恐る恐るその該当者の渾名を口にする私。
「うん、そうだよ……。もしかして、全然気づいてなかったの？」
「あ、うん……。ゴメン。他人の空似だと思ってた」

気不味いけど、それを堪えて正直に言った。
「ミナ、酷すぎるぅ！　号（┻Д┻）泣この仕打ちはあんまりだよぉぉぉぉぉぉ!!」
結衣、ギャン泣きである。
……私、もしかしなくとも地雷踏んだ？　特大級の。
「……だろうな」
何時の間にか実体化し花梨の姿になった瑠璃が呆れた表情を見せていた。

「あー……これはしばらく泣き止まねぇパターンだわ……」
翡翠色のロングヘアーをサイドテールにした紅い瞳の女子生徒が嘆息混じりに呟いた。
「あっ……翡翠、貴女も実体化出来るんだ……」
何か気付いた花梨が女子生徒に話しかける。
「はい。この姿の時は『椎名翠(しいなみどり)』です。『翠』とお呼びください。姉様」
「私のこの姿の時の名前は『三嶋花梨』。フツーに『花梨』と呼べばいいから。あと、敬語も要らないから。色々と誤解されるし」
「わかりまｓ……解ったわ。花梨」
花梨と翠の会話は弾んでいた。
花梨、良かったね。友達が出来て。
「でさ……結衣だっけ。翠、何とかできないの？」
「無理……かな。あそこまで泣かれると匙投げるレベル」
「そっか……じゃあ凪優に頑張ってもらうしか無いんだ……」
「そうね。それしかなさそう」
「……だってさ。1人で頑張ってね！　凪優」
……!?　矛先こっちにキラーパスされた!?　ナンデ!?
「花梨……なんで……私1人なの!?」
「だって、凪優の自業自得じゃん。それに勝手に私をボッチ扱いした罰だよっ!!」
「え……？　ボッチ……でしょ？」
「違うわぃ!!　酷いな!?　私だって友達位いるからね!?」
何時の間にか花梨と口論になる私。
「ぐすっ……ひぐっ……あのさ……私……何時まで放置なの？」
結衣が自分で泣き止み、言った言葉に私達は押し黙る。
「「……あ」」
そして私・花梨・翠は何かを思い出したかの様に揃って発言する。
「な、何……??」
「「お前のこと、すっかり忘れてたわ」」
結衣の質問に3人は同時に衝撃の答えを言い放った。
「ウワァァ――――。。（。´Д、。）。。――――ン！　何、コ

イツ等!!　超酷いんだけどぉぉぉぉぉぉ!!」
その答えに再び大号泣の結衣。
周囲の……特に戦妹である　間宮あかり　からも私に対する視線は痛かった。
正直、私がギャン泣きしたいくらいな心情である。
それを必死に堪えて私はこの後、３０分くらいかけてヒメを慰め、今までで経験したこと無いくらいにかなり謝り倒したのであった。
続くんだよ。

第０１２弾　事件解決の最短最速は真似すんな。

リアルでギャン泣きしたくなるくらいに慰めるのに精神疲労が半端なかった戦闘訓練の翌日の朝、私はキンジと何時もどおりに朝食を摂っていた。

今日から昨日ギャン泣きした結衣が同居人として増えているけどね。どうでもいい余談だがアリアは不在だ。何処に行ったかは知らんけど。

戦闘訓練終了後に結衣は私との同室を希望したが、私の部屋は無くキンジと同棲状態な現状である。

納得の行かない結衣がゴネにゴネた結果、蘭豹がブチギレた為に投げやりで結衣もキンジの部屋に同棲する事となった。

その事実を知ったキンジは結衣の完全な事後承諾状態な事も相まって深い絶望に染まりに染まるわ、染まる（笑）

ドンマイだ、こうなっては天地が逆転しても覆らないからもう諦めろ（笑）

「そういえば、キンジって今日からバス通なんでしょ？　時間大丈夫なの？」

「え、まだ余裕あると思うんだが……」

私が思い出したかの様に問うと、キンジは自身の腕時計を見て答える。

「え、何言ってるの？　もう出ないとフツーに間に合わないと思うんだけど」

私は自分の腕時計を見て発言する。電波時計だから時刻の狂いはない筈だ。

「な、凪優……い、今の時刻は……？」

キンジが恐る恐る現在時刻を尋ねる。

「７時５２分」

「んなっ、マジかよ！」

私が答えるとキンジは慌てて飛び出していった。

確か次のバスは５８分だからギリ間に合うかどうかレベルだな。ワンチャン遅刻もありうるだろう。

「で、私達は何で行くの？」

呑気に味噌汁を啜りながら結衣が質問する。

「そりゃ、雨だし車でしょ」

「免許持ってんの……？」

「当たり前でしょ」

結衣の発言に呆れる私。

持ってなかったら『車』っていう答え出ないんだけど。

結衣さんが安定な　Ｏ★ＢＡ★ＫＡ　すぎて涙出てまうわ。そこは改善して欲しかったんだけど……無理だったか。来来世でも無理そうだ。勘だけど。

「ミナ、ケータイ鳴ってるよ」

「あ、ホントだ。えっと……アリア??」

結衣の事で現実逃避していた私を現実に回帰させたのは結衣の指摘だった。

私は何処で何か納得いかない感情を抑えつつ通話に出る。

「もしもし？　アリア、どうしたの？」

『凪優、今どこ？』

「え、まだ（男子）寮だけど？」

『今すぐＣ装備で女子寮の屋上！　いいわね？』

切羽詰まっている様子のアリア。

『Ｃ装備』……強襲科の生徒が所謂、『出入り』に使う装備だ。

「……事件か」

「ええ」

私の言葉に肯定するアリア。

「わかった。今すぐ向かう」

私が返事を返すと直後に通話は切れた。
「どうしたん？　ミナ」
ようやく朝食を食べ終えた結衣が先程の通話内容を尋ねた。
「事件だってよ。ヒメ、アレ使えるよね？」
「え、大丈夫だよ。粒子そんなに飛んでないし」
私が使っても良いけど、何となく頼んだ方がいい気がした。カンだけどな。
「じゃあ、ちょいとお願い」
「あいあいさー。……で、何処なの？　場所は」
結衣が肯定した後に行き先を聞かれたので、
「ちょい待……えっとね、第一女子寮の屋上」
片手間で武偵ネットにアクセスし事件（ホシ）を特定して推測だが合流地点を割り出す。
伊達に情報科（インフォルマ）所属でありませんことよ。
「りょーかい。行くよ、凪優」
「あいよ。いつでもどうぞ、結衣」
私の頼みを了承した結衣は真面目モードになりアレを発動させた。
行き先は無論、第一女子寮屋上である。
「その前にさ、どうするのよ？　凪優」
「何がよ、結衣」
出鼻を挫くような結衣の指摘に怪訝な表情を浮かべる私。
「アレだよ、アレ。どうすんの、花梨ちゃん」
結衣の指差した方向に存在しているのは絶賛爆睡中な花梨。
「放置したいけど……後が面倒だよね、絶対」
クソデカ溜息な私である。面倒くさいのは事実だし。
かと言って、起こすのは絶対時間ロス確定だ。
どうしたものか。
「私が残るよ。花梨ちゃん、拗ねたら面倒臭いし対処する人が居なきゃね？」
花梨の御世話役に立候補したのは翠だった。
「え、良いの？　私としては、すっっごく有難いんだけどさ」

「はい。別に構いませんよ？　それに、あられもない花梨ちゃんを独占して堪能できるし……」
翠がなんかトリップしてるのは多分気のせいだと信じたい。私に害は――普通にあるわ。主に花梨経由で。
どうするかなぁ……本気でさ、断るべきか否かだよな。
「凪優、もう翠に任せれば良いんじゃない？」
「え、大丈夫なの……？」
色々と煩悩が漏れ出てる気がするのは紛れもない現実だろうしなぁ……。
「まぁ……うん。凪優の懸念も解るよ、ものすっごい解る。でも断ったら余計面倒になるから……さ？」
結衣の表情は何かを達観した遠い目。
「お、おぉ……」
結衣の反応に私は唯唯頷くしか選択肢は無かった。
故に花梨は生贄（sacrifice）となって貰おうか。拒否権は許さんけどな。
と、言う訳で花梨を翠に任せ、私と結衣はアリアの下へ急ぐのだった。

「お待たせ、アリア」
結衣のアレで私達が女子寮の屋上に到着すると既にアリアと狙撃科（スナイプ）の麒麟児の異名を持つレキがそこにいた。
レキはアリアが呼び出したのだろう。バックアップは必要だからな。
「早っ！　どうやって来たのよ。確かにあたしは『今すぐ』とは言ったけど……」
あまりの私達の到着の早さに驚愕するアリアは結衣のアレ――瞬間移動（イマジナリー・ジャンプ）自体、初見なのだろう。それは無理も……ないわね。
瞬間移動を使用する超偵は世界に私と結衣を含めても両手で数える程しか存在しないのは単純な理由なのだ。
燃費がクソ悪い。1日1回しか使えないので好き好んで使う奴も

居ない。
『それ意外何があるというのだ？』レベルの単純さである。
色金の神と法結びしても使用限度が1日1回なのに何故か複数回連発出来る例外も居るけどさ。
まぁ、それ私と結衣の事なんだけどね。完全に花梨――瑠璃神がチートな証だよね。うん。

「え、私の能力で」
結衣は隠す事もなくアッサリ答えた。
「そ、そう……。まぁいいわ」
アリアはそれ以上の言及はしなかったのはアリアの勘が何かを告げたのだろう。
アリアよ、その判断は正しいぞ。
結衣に言及してたら事件が一向に解決できずに任務失敗で終わるだろう。
てか、実際に昔そんな事あったし。
「で、どんな事件？」
「バスジャックよ」
私が事件の内容を尋ねるとアリアから『バスジャック』と回答が帰ってきた。
「バスジャックか……。って事はまた武偵殺し絡みなのね」
「そうよ」
私の質問に肯定するアリア。
そうか……『武偵殺し』ねぇ……また動き出しやがったのか。
私の個人的な犯人の目星は大方付いているのだが、狙いが解らん。
去年の冬のシージャックはカナ姉……金一さんだったんだけど、その弟のキンジ……という線は考えにくい。
だとすれば……アリアか……？
アリアとなれば狙いにする理由が何処かしらあるはずだが、推測しようにも情報が足りない。
確証を得るのに……そのウラが取れれば問題はない。

そのウラを取るのにもってこいの術式があるのだけど、その術式を対象者に仕込むのにすっごい致命的な欠点がある。
リスクも承知でどうにかして仕込まねばな……。
私がそう考えているとバスジャック制圧の人員が増えた。
その人物とは……なんと、キンジだった。
どうやらあの後ダッシュでバス停に向かったものの、タッチの差で間に合わなかったらしく遅刻上等で徒歩で向かおうとした時にアリアから連絡が入ったらしい。
連絡を受けて急いで来たものの、メンバーの中では到着が遅かったので、キンジはアリアに怒られていた。
キンジ……哀れな男。
それを結衣は不機嫌そうに見ていた。
まさか……ねぇ？
結衣がキンジに恋慕を抱いていることは……多分ないだろう。うん。
……。

いやいやいやいや、あったわ。
マジこれ、結衣の奴アリアに嫉妬してんじゃねぇかよ。
恋慕抱いてんじゃねぇか。
……あ、どうしよう。新たに問題発生してんじゃねぇか。
あの武装巫女……白雪の事だ。
彼女のことだ。絶対に殴りこみされる……。
そうなったらそうなっただ。
寮の敷金の問題になる前に凍らせておくか？　マジで。
「凪優……？　状況説明（ブリーフィング）するわよ」
「あっ……ゴメン。始めて」
「解ったわ。先ず、今から解決するのはバスジャックよ」
「――バス？」
「乗っ取られたのは武偵高の通学バスよ。凪優達のマンションの前に7時58分に停留したハズのヤツ」

キンジはそれを聞いて驚愕の表情。
それは無理もない。何せ、自分が乗るはずだったバスが乗っ取られたんだから。
そして、そのバスに武偵高の生徒がすし詰めに乗っている事も。
幸か不幸か……。
そのバスに武藤も乗ってるんだよねぇ……。見知った気配を感じたので、試しに気配察知してみたらドンピシャでビックリなんだが。
「――犯人は、車内に居るのか」
「それはわk「居ないわね。バスに爆弾仕掛けられてるわね」……凪優？」
キンジの問いにアリアが答えようとするのに被せる様に断言する私。
「凪優、アンタ解るの？」
「見えないけど、大体は見知った気配数名と見知らぬ不穏な物が床下にあるって事は感じる。だけど見知らぬ人の気配は感じないわね」
「ミナ……凪優が言うんだったら間違いないね」
アリアの懸念に対して私が返答すると結衣が肯定した。
「姫神……だっけか。どうしてそんなことが言えるんだ？」
「『結衣』でいいよ。キンジ。凪優の気配察知は人外の域に達していて大体的中してるから」
キンジは半信半疑だったようだが、結衣の発言で一応納得はしたらしい。
「成程ねぇ……やるじゃない、凪優。……で凪優はどう思ってるわけ？」
「ま……この手口は以前のチャリジャックと同一犯でしょうね。アリアもそう思ってるんでしょ？」
「ええ。ヤツ――武偵殺しは毎回、乗り物に『減速すると爆発する爆弾』を仕掛けて自由を奪って、遠隔操作でコントロールするの。でも、その操作に使う電波があるの。それが―」
「『それが今回キャッチしたのとキンジのチャリジャックと同一だった』って訳ね」

「そうよ」
アリアと私はお互いの情報を共有し、武偵殺しの手口などを紐解いていた。
その間、結衣とキンジは放置なわけだが……結衣、そこでアホ面晒してんじゃねぇよ。
思考の渦から復活したキンジが私とアリアの会話の間に割って入る。
「おい、待て。アリア、凪優。あの時の犯人……『武偵殺し』は逮捕されたハズだぞ」
「それは真犯人じゃないわ。キンジ」
「アリア……？　何を言って……」
「あんな狡猾な手を使う奴がアッサリ捕まる訳が無い。あの時捕まったのは替え玉よ」
「『替え玉』って……凪優まで何を言ってるんだよ。どういう事だ」
「キンジ……それは後にして。どうやら御迎えが来たみたいだから」
「結衣……？　『御迎え』って何だよ」
「コレだよ」
キンジの言及を止めた結衣が背後を向くと、タイミングよく青色の回転灯を付けた車輌科（ロジ）のシングルローター・ヘリが女子寮の屋上に降下してきていた。
私達は直様にヘリに乗り込む。キンジも納得いかない表情だったが、その後を追うようにヘリに乗り込んだ。
ヘリは私たちが乗り込んだのを確認した後、女子寮の屋上から飛び立った。
ヘリでの移動中に今回の事件の状況整理を行う。
インカムに入ってくる通信科（コネクト）からの話によると、武偵高のバスの車種はいすゞ・エルガミオ。
武藤達を7時58分に第三男子寮前で乗せた後どこの停留場前にも停まらず暴走を始め、その後車内に居合わせた生徒達からバスジャックされたとの緊急連絡が入った。
定員オーバーの60人を乗せたバスは学園島を一週した後に青海

南橋を渡り、台場に入ったらしい。
警視庁と東京武偵局は動いてるものの、到着には時間がかかるらしい。
どうやら私達が一番乗りのようだ。
「ねぇ、美咲。バスの中にいる武藤に通信できるかしら？」
『えっ……はい。可能です』
「ちょっと繋げてくれるかしら？」
『了解です』
私は状況説明をしてくれた通信科の生徒……中空知美咲にバスジャックされた車内に居る友人の武藤剛気に通信を繋ぐように依頼する。
私の依頼に美咲は応じ、剛気と通信が繋がる。
「剛気……ちょっと良いかしら？」
『その声……まさか凪優か!?』
「ええ。その通りよ。アンタ、バスの中に居るんでしょ？　生徒達に指示をお願い」
『指示って……何をだよ』
「簡単な事よ。人が４人活動できるスペースを空けるだけよ」
『窓側とか指定は無いよな？』
「ええ。何処でも良いわ」
『解った。今すぐ対処するぜ』
「頼むわ」
私は剛気との通信を終了するとアリアとキンジ、結衣、レキに指示を行う。
「アリア、キンジ。高所からのダイブは問題ないわよね？」
「それは……問題ないけど、何をする気なの、凪優」
「俺も問題ないが……何をする気なんだ。凪優」
「何って……最速でバスの中に突入するのよ。……結衣」
「りょーかい。私は準備できてるよ」
「レキ、貴女はヘリに残ってバックアップをお願い」
「解りました」

アリアとキンジが疑問を口にし、結衣とレキは私の指示に了承した。
アリアとキンジには悪いが、説明している時間はない。
「凪優……私がキンジを連れて行けば良いの？」
「ええ。私がアリアを連れて行くから。結衣……バスの座標リンク大丈夫よね？」
「うん。問題ないよ、凪優。行こっか」
「ええ。そうね」
私はアリアを、結衣はキンジをお姫様抱っこで抱えて、開け放たれたヘリのドアの前に立つ。
「ちょっと、何をする気なの、二人共!?」
「そうだ。一体何をする気なんだよ!?」
アリアとキンジはワケが解らず、騒いでいた。
「悪いけど、説明している時間は無いから実行させて貰うわ」
「あと、二人共あんまり喋らないでね。舌噛むし。それに手を離すと死んじゃうから」
「えっ……」
「行くよ。結衣」
「ＯＫ。凪優」
アリアとキンジの返事を待たずに私と結衣はヘリから飛び降りた。
勿論、パラシュートは……無い。
あっても邪魔だからな。
落下する途中で私と結衣は瞬間移動を発動させた。
ヘリからでも出来なくもないが、屋外の方が座標がブレないのだ。
私と結衣の姿が光に包まれて消えた。

「「はい。到着っと」」
私と結衣はハイジャックされたバスの車内に転移し、予め剛気に指示しておいた空白のペースにアリアとキンジを降ろした。
「まさか……こんな突入方法とは思ってもなかった……」
「流石のアタシでも同感だわ……」

キンジとアリアはまさかの常識を超えた突入方法にげんなりしていた。
これが『普通の思考』というやつなのだろうか。
「え、だってこれが最短最速の突入方法じゃない」
私はきょとんとした表情で言う。
うんうん。と賛同するヒメ。
「「……マジかよ」」
キンジとアリアは限度を超えたセオリーの行方不明さにたった一言呟くのが精一杯だった。
「さて……と。始めるか」
私はバスの適当な床に手を当て詳細状況の把握を開始する。
「な、何やってるの、凪優!?」
アリアは私の行動に異を唱えたが、結衣がそれを制す。
「大丈夫。ミナは接触感応能力使っているだけだから」
「接触感応能力？」
「そ、触れたものの情報を読み取ることができるの」
「まず、爆弾は車体の下にある。カジンスキーβ型のプラスチック爆弾で炸薬容積は３５００ｃ？ってところね」
私がこのバスに仕掛けられた爆弾の情報を読み取る。
オイオイ、まーじかよ。こんなの……バスどころか鉄道車両が吹っ飛ぶ威力じゃないの。
「ねぇ結衣、アタシを爆弾の近くに転移して」
アリアが結衣に提案する。
爆弾の解除を試みるつもりなのか……？
「わかった。無茶しないでよ」
結衣は了承し、アリアを爆弾の近くに転移させる。
その際、結衣の口から発せられる言葉として違和感があったのは多分私の気のせい。
懸念が脳裏に過ぎった直後だった。
ドンッ！
私達の乗ったバスに衝撃が襲う。

先程までバスの後ろを走っていたオープンカーに追突され、その衝撃に転んでしまう私達。
「アリア……!?　大丈夫!?」
『……』
応答が……無い。
私は慌てて瞬間移動でアリアをバスの中に転移させる。
アリアは先程の一件で額を切っていて、出血多量によって意識を失っていた。
私は即座に能力を使ってアリアの治癒を行う。
今の状態だと完璧に治癒するのは難しい。
まぁ……痕は残るだろうが、大丈夫なはずだ。

「……っ!?」
ぞくり。
アリアの治療中のその時、私は何か……嫌な予感がした。
「……？　どうしたの、凪優」
私の行動を不審に思った結衣が尋ねる。
「結衣……障壁を今すぐにこのバスの周囲に展開。そして……総員、伏せろぉ!!」
私は怒鳴るように指示を飛ばす。
「影布七重対物障壁（ウンブラエ・セプテンクレクス・バリエース・アンティコルポラーリス）!!!」
私の指示で結衣が影で作られた障壁がバスの周囲に展開された直後、オープンカー……ルノー・スポール・スパイダーに装着されたUZIが火を吹いた。
無数の銃弾は大半が障壁に防がれるも、障壁を逃れた銃弾によってバスの窓ガラスは粉砕された直後、バスが妙な揺れ方をする。
運転席を見ると、運転手がハンドルにもたれかかるように倒れている。銃弾は運悪く、バスの運転手の肩に被弾していた。
運転の為に身体を下げられなかったのか……。
運転手のいないバスは左車線に大きくはみ出して避けた対向車がガードレールにぶつかって火花を散らし、それに輪をかけて減速を始

めている。
マズイぞ……これは……。
「有明コロシアムの　角を　右折　しやがれ　デ、ＤＥＡＴＨ」
更に輪をかけてさっきの衝撃で転んだ女子生徒の携帯からボカロの合成音声が聞こえる。
語尾のイントネーションが『ＤＥＡＴＨ』に聞こえたのは当てつけか……？
私はキンジと男子生徒にバスの運転手を座席に寝かせるように指示する。
「結衣、能力で傷の治癒……できるよね？」
「う、うん……。出来るけど……」
「じゃあ、運転手さんの治癒頼むわ。あと、障壁の維持も」
「りょ……了解」
「剛気、運転変わって。アイツの指示通りの道で走るのと減速させないで。絶対」
「い、いいけどよ！　オレ、こないだ改造車がバレて、あと1点しか違反できないんだぞ！」
「それ、自業自得でしょうが！　んなこと言ってる場合じゃないでしょ」
「うぐっ」
剛気は私の正論に押し黙った。
「それと、これ……装備しておいて」
私は自分の装備していたＣ装備を脱いで剛気に投げ渡し、防弾制服姿になった。
「お、おい！　何で脱ぐんだよ!?」
「いいの、キンジ。こっちの方が動き易いし。キンジ、アリアと結衣のサポート宜しく」
「あ、ああ……」
私は瞬間移動を使い、バスに追走しているルノーの運転席に転移した。
ルノーの運転席に転移した私は先ず、遠隔操作の制御チップの位置

を探り最近練習中の電気系統の能力で制御チップの上書きを行う。
上書きが終了しルノーが私の制御下に置かれたので取り敢えず、通常の手動運転にセットして私はルノーを運転する。
その時だ。ルノーの横に……無人ベスパがいた。
通常では有り得ないほどのスピードなので改造モノだろうし、更に運転手が居ないので遠隔操作されているのだろう。
私がベスパの存在を認識した刹那、ベスパにセットされたＵＺＩが火を吹いた。
私はルノーを運転し銃弾の雨を回避するが、このまま回避するだけじゃ埒があかない。
なので、私はルノーを『自動操縦』に切り替える。
何気にこのルノーに搭載されたＡＩチップは高性能な故に『最適なコース』で回避しつつ、走行できるっぽい。
どうやら、ベスパに搭載された物よりも、こっちが高性能らしくカンペキにベスパから放たれる銃弾の雨を被弾ゼロで回避していた。
私は運転席の上に立ち、６ウニカとトーラス　ジャッジ　Ｍ５１３ジャッジマグナムをホルスターから取り出して、ＵＺＩとベスパの制御チップを狙って、発砲。
迫り来る銃弾を銃弾撃ち（ビリヤード）で弾き、ＨＩＴさせていく。
ＨＩＴしたベスパは制御権が消滅し、転倒して壁にぶつかって爆裂霧散。
次々とベスパを爆裂させていく私。
しかし、そうも順調にはいかなかった。
なんと、第３波でガトリング砲付きのドローンが襲撃してきたではないか。
ギリギリで回避するルノーだがしかし、隙がないのと……射程が……足りない。このままではジリ貧だ。どうすんだよ……。
そう思った時だ。
『凪優、大丈夫なの!?』
通信が入った相手は……アリアだ。
「アリア!?　アンタの方こそ大丈夫なの!?」

『あたしは大丈夫よ。今から凪優の援護に入るわ！』
アリアからの提案……これはまたとないタイミングだ。
「解った。じゃあ、今から私と交換でルノーに乗ってベスパを撃墜して頂戴」
『解ったわ……って、運転しながら!?　火力負けするわよ!?』
私の依頼に驚愕のアリア。
「運転は自動運転だし、問題ないわ」
『解ったわ。……で、凪優はどうするの？』
「私？　私は……バスの上に乗ってドローンの撃墜をするわ」
『ドローン!?　何でそんな物が!?』
「さぁ？　大方、私を始末するためでしょ？」
『そう……』
なんか納得してるよね？　アリアさん。
その、『凪優（わたし）だから仕方ないよね』って言う反応止めてくれます？
「あぁ……あとC装備は脱いだほうが良いわね」
『何でよ!?』
「だって……動きにくいじゃないアレ」
『まぁ……アドバイスとして受け取っておくわ』
「よし……10秒後に交換するわよ？」
『解ったわ。凪優、ベスパの狙いどころは？』
「取り付けのUZIと外付けのでかい制御チップ」
『ふぅん……了解よ』
通信が切れると同時に私は瞬間移動を発動させ、アリアをルノーの運転席に自身をバスの屋根に転移させる。
バスの屋根上で足元に能力を発動させることで、落下は防げるだろう。
「氷槍弾雨（ヤクラーティオ・グランディニス）!!」
私は能力によって周囲に展開させた大量の氷片の槍を一気に降らせて攻撃する。
魔法（サギタ・マギカ）の矢よりも威力は強力なのでこちらを選択した。
この技には上から下へしか降らして攻撃することしかできないと

いう欠点が存在するが、今回は展開する始点をドローンの上に設定している。
それと、自動追尾も可能なので回避される事なくドローンを粉砕する事が出来るのだ。
私は迫り来るドローンの群れを片っ端から粒子へと変えていくと、バスはレインボーブリッジに差し掛かっていた。
さて……そろそろ終幕の時間だ。
「レキ……聞こえる？」
『問題ありません』
「バスの下の爆弾の停止スイッチを捕捉できるかしら？」
『可能です』
「そう。だったら合図したらスイッチを狙撃して、爆弾を停止させて」
『解りました。凪優さん、カウントお願いします』
「了解……。ｆｉｖｅｃｏｕｎｔ。５、４、３、２、１……０」
『――――私は一発の銃弾――――』
レキの声に続いて爆弾に狙撃されると的確に停止スイッチが作動し、爆弾が停止すると同時に私は爆弾を瞬間移動を使い海上に転移させる。
「氷（ニウイス・カースス）　爆！！」
私は空気中に氷を瞬時に発生させ凍気と爆風で攻撃する技を使い爆弾を破壊し、海上で綺麗な？　花火が打ち上がった。
「よし、これで……」
『一件落着っ！』
それを確認し、通信で歓喜する私と結衣。
その後、バスは停止しバスジャックは無事解決となった。
その後、事後処理が行わる流れとなり、結衣は一足先に武偵高へ戻った。
ま……無理もない。運転手の治癒にかなりの能力を消費したから疲れたのだろう。
「な、何とかなったわね……。凪優と結衣がいて正解だったわ」

「あ、ああ……。そう……だな」
アリアと今回、殆ど出番なしのキンジは二人安堵の表情で顔を見合わせていた。
「あ、そうだ……アイツにメール送っとこ」
私はバイト先に頼まれていた事をある人物に頼むべく、メールを送ったのだった。
Ｓｉｄｅ―Ｏｕｔ……

Ｓｉｄｅ―???
「な……何なんだよ!!　これは――――っっっっ!!」
あたしは一人、思いっきり絶叫していた。
バスジャックを解決されるのは想定内。寧ろ――予定通りといっても良いだろう。
しかし、完全に想定外なことが起きた。
キンジが……遠山キンジがこのバスジャックで殆ど何もしていない。案山子か!?　おんどれは。
アリアと組ませてそこそこの活躍をさせるはずだったのに。それすら出来ていないのだ。
これではパートナーどころではない。ってかそれ以前の問題。
アリアが、悲劇のヒロイン。
キンジが、主人公……。
そうなるはずだったのに。
このままではモブキャラ一直線ルート確定だ。
そうであっては困る。
なんとしてでもキンジには主人公になって貰わねば。
こうなってしまってはあたしがその気にさせるしかあるまい。
どんな手段を使ってでも……。
とは……いえだ。
それには障害がある。
凪優……水無瀬凪優の存在だ。
彼奴の事を調べたものの、最低限のことしか出てこなかった。

それに、情報も理路整然としていた。不自然なくらいに。
詳しく調べようとも全然情報が出てこない。
何なんだよ、彼奴は。
それにあの異常な強さ……只者じゃない。
あのレベルとならば……裏においても相当な実力者なはずだ。
まさか……ね。
ふと、そんな思考が頭をよぎる。
あたしの所属する組織、『イ・ウー』
そこには穏健派と過激派、第3勢力が有ったが、今は穏健派と過激派の2分割となっている。
穏健派は『研鑽派（ダイオ）』、過激派は『主戦派（イグナティス）』と呼ばれる。
『主戦派《イグナティス》』の党首の名は綾野未海。
そして、『研鑽派（ダイオ）』の党首の名は……水無瀬凪優。
彼女は『氷天の魔女』の二つ名を持つ氷系の能力者だ。
その実力は凄まじく、イ・ウー内でのＮｏ．２の片割れと謂われている。
最初はあたしは同姓同名の他人かと思っていた。
だが、前回と今回の無双劇を見てそうは思えなくなっていた。
まさか……同一人物なのか……？
だとしたら、あたしはとんでもない人物を敵に回した事になる。

確実に凪優は介入してくる。
既にあたしの事も目星は付けているだろうし……確実にあたしと対峙する事になったら……間違い無く勝ち目は……無い。
あぁ……もう。あの時、ジャンヌ達に啖呵切ったのは間違いだった。負ければ……嘲笑されるだろう。
あのクソ爺共とか絶対そうだから、それだけは……真っ平御免だから……全力で抗ってやる。

そう強く決意するあたしだった時だ。あたしのケータイにメールが着信される。

相手は……付き合いの深い武偵高の友人だった。
なんでも彼女のバイト先の人手が足りないらしく、ヘルプを頼みたいらしい。
まぁ……気晴らしになるし、ちょうどいいだろう。
このまま考えていても気が滅入るし。
そう思ったあたしは友人に
「バイトのヘルプＯＫ」
と返信するのだった。

Ｓｉｄｅ＿Ｏｕｔ……